

最明寺本宝物集総索引稿(二)

菅原範夫

凡例

「第二部（付属語の部）について」

一、第二部には助詞、助動詞を取めた。

一、各用例には前後の部分を用し、用法が知られるように留意した。用例のうち、項出の付属語に

当る部分を——で示した。

一、用例には句読点をつけなかった。

一、複合助詞、複合助動詞は、それを構成する各助詞又は助動詞のそれぞれの項に掲出して示した。

そのうち、特に用例の多いものは一括して後に掲げ、小見出しを立てて「」に包んで示したが、必

ずしも徹底していない。

一、同一語に用例数が多い時は、その中を、活用形（その中は出現順）・用法によって細分し、それぞれの用法を示す小見出しを添えた所がある。

か

か (終助詞)

あまのもしをひたくーとや見む

三三三

わすれてはゆめーとぞおもふおもひきや
仙むかしはいて給はざりしーと申ければ

三三三
一八三

なかく出離の期なからむものー

二二五

もしわがたのことーとて

三三三

か (係助詞)

たれー観音の来迎をはれたるはある

三三三

いかなることーありけむ

三三三

たれー過去の如来とする

三三三

か (格助詞)

I 主格

藤原家經ー後冷泉院御時の大嘗会の主基の方の

三三三

哥によめるは

三三三

賀茂重保ーとしころ御いのりなどしてつかまつ

三三三

りけるが

三三三

蓮花せーたわふれにあまのけさをきたりし九ま

三三三

II 連体格

1 体言十が

百日ばかりーうち

三三三

秦始皇ー人魚油

三三三

須達ー祇園精舎をつくりて

三三三

提達多ー仏身よりちをあやいし

三三三

うはり尊者ー持戒なりし

三三三

善屋比丘ー破戒なりし

三三三

かせう尊者ー威儀をととのへし

三三三

六軍比丘ー威儀をわすれたる

三三三

舍利弗尊者ー智慧にとめりし

三三三

周梨船特ー鉤根なりし

三三三

耆婆ー薬のかめをにぎりてむまれ

三三三

鷓鴣ーみのうちの病をみ

三三三

我等衆生ーふかくたのみたてまつるべき

三三三

聖人の一處も見ざりけるー處をもふまむとて

三三三

少沙弥のありけるー輕慢して

三三三

われらーため

たれーちから

仲船ー説法の

栴陀羅ー鉢

道如ーため

王氏ーため

智興ーごとし

聖縛ー廟

法堅ー在生のつみ

2 連体形ナが

(がうへ)

申のへかたきーうへに

(がごとし)

衣羅をますーごとか

一切のやまひを滅するーごとか

あよはざらんーごとか

なきーごとし

まねをするーごとし

まねをせんーごとか

振動するーごとか

子をおもふーごとか

いふーごとかに

二五五

二五七

二六一

二六二

二六三

二六四

二六五

二六六

二六七

二六八

二六九

二七〇

二七一

二七二

二七三

二七四

二七五

二七六

二七七

二七八

二七九

二八〇

すくれたるーごとか

がたぎーごとか

(がため)

ふせかんーために

ほめられんーために

したかへむーためなり

(がゆゑ)

園別なきーゆへに

おそれあるーゆへに

重罪□物なるーゆへに

力によるーゆへに

せめらる□ーゆへに

臨終正念ならざるーゆへに

心なきーゆへに

申べきーゆへに

をもちーゆへに

あめをそくーゆへに

よはぎーゆへなり

が(接続助詞)

御いのりなどしてつかうまつりけるー心うくか

なしくおほえければ

かへりけるーいか、おもひけむ

四四七

四四八

四四九

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

四五〇

つくりてとらせけるーいかなることかありけむ

三〇七

一向に後世門にいりておこなひけるー本尊をも

三〇八

かしの終助詞

何運にほこりて速なることをうらむるとは申た

三〇九

あさましく侍しとしぞー

三一〇

の給けるは(略)とはの給ぞー

三一一

かな(終助詞)

うらやましくもすめる月ー

三一二

2 連体形+かな

あはれなるべきにわのをもー

三一三

あはれなるーや

三一四

なきはおほくもなりにけるー

三一五

そてふりしはるのにわともみえぬー

三一六

よのほとにうえられにけるーと

三一七

この語まことなるーや

三一八

き

き

「せ」(未然形)

仏よにいてたまはざりーば

「き」(終止形)

六七月ばかりにうせさせ給にー

下京の人くるからすになり侍にー

中々のやみをば□らざりー

仏法に歸し給ー

たのしみ給ことなかりー

ついに仏法に歸しー

わすれてはゆめかどぞおもふおもひーや

昔もいて給ー

をばりに仏をみたてまつることありー

すへにのりをきくことをえたりー

昔七度還俗したる物ありー

差別あることなかりー

乃往過去に大王をはしー

病を治せずといふものなかりー

うけ給はりぬとことうけ□給てー

仏におもひをかたりー

三一九

三二〇

三二一

三二二

三二三

三二四

三二五

三二六

三二七

三二八

三二九

三三〇

三三一

三三二

三三三

三三四

三三五

わかしハカシ 聖徳太子ハハ 波羅門ハハ といふものありー

香婆大臣ハハ はゆをわかしてあむしー

大臣ハハ せいせしかどもやむことなかりー

一五百生ハハ 犬のかたちにもまれー

八十の寿ハハ をえたりー

天竺ハハ に愚直ハハ といふものありー

唐土ハハ に僧ハハ 弼ハハ といふものありー

「し」(連体形)

善財童子ハハ の菩提心ハハ おこし給ーをば

むかし見ー人は

二万の人ありーところ

神功皇后ハハ のせめ給ー時

なかも一人もいつらは

あさましく侍ーとしぞがし

まやふ人のうつり給ーゆふへ

なげきかたしめるいろにてぞ侍ー(係結法) 九ウエ

そてふりーはるのにわともみえぬかな

いつかはそてにつゆはこほれー(係結法)

あきみち給ーをり

十善の位ハハ にありー時は

前後ハハ にしたかひーこと

君達二人おはせー一人は

わろしと申しー定

祇園精舎ハハ におはしましー時

仏ハハ おかしはいて給はざりーか

表羅門ハハ 之けにゑひて僧ハハ のまねをしたりー

蓮花ハハ 仕がたわふれにあまのけさをきたりー

祇園精舎ハハ をつくりたてまつりーをも

仏身ハハ よりちをあやいーをも

父ハハ をころいーをも

八万四千の命ハハ をころしーをも

うはり尊者ハハ が持戒ハハ なりー

善星比丘ハハ が破戒ハハ なりー

かせう尊者ハハ が威儀ハハ をとゝのへー

舍利弗ハハ 尊者が智恵ハハ にとめりー

周梨ハハ 船持が鈍根ハハ なりー

摩耶夫人ハハ のはらにやとりたまひーより

悉陀ハハ 太子と申しーころ

のりとぎ給ー時

十口世界ハハ の諸仏ハハ 菩薩ハハ あつまり給へりー中に

きのふまでつくら

ものかたりに申しーことどもを

影賢王ハハ の千僧ハハ を供養ハハ せー

阿育王の諸僧を拜せー
維那のおろかにして外僧をあなつりー
少年たわふれに老僧をわらひー

四三〇
四三一
四三二

漢武の岱宗にいのりー
法財王子の菩薩の行をたいせー

四三三
四三四

「しが」(已然形)

四三五

七月八日かくれおはしましにーば
一天下の國母にておはしましーば

九六
九七

おひた、しくなりにーば
いにしへもたまのうてなは見ーども

九八
九九

悪道へおとし給はとの給ーば
天上をゆかしかりーば

一〇〇
一〇一

智証大師渡海せーば
指鬘比丘は悪人なりーば

一〇二
一〇三

大臣せいせーども

一〇四
一〇五



けむ

「けむ」(終止形)

みちひき給ー

「けむ」(連体形)

一〇六

はなさきなばとなにおもひー
いか、おもひー(略)と申ければ

一〇七
一〇八

けり
「けり」(終止形)

二万のさと人がすそひにー
くしたてまつりてせめ給ー

一〇九
一一〇

三人などうせ給にー
仏道をもとめ給ー

一一一
一一二

まいりあはざればかひなかりー
馬をひきいたしてとらせてー

一一三
一一四

わがたみなうえられにー
はかなくわつらひてうせにー

一一五
一一六

東山にまつしき女ありー
は、をもちたりけるにをくれにー

一一七
一一八

かぎおいていてにー
しうとまりにー

一一九
一二〇

仏ばかりの人はおはしまさゞりー
盲目になりにー
やうくとしつもりにー

一二一
一二二
一二三

「ける」(連体形)
ける十体言

せめむかひ給ー時

一二四

かへり給にーのち

橋能俊と申ー

法師になり給ーころ

月のあか、りーよ

はるきてもとはれざりーやまさを

かなしかりー

そのーとりにすみー老たる

くひーもの

かならすまいらせーほとに

子なりーおとこ

ふせりーよ

いみあきーまゝに

河内国に侍ー聖人

まなしりをならへておはしましー御まへ

木いててふか、りーとき

つふふしにたちーこ

2 連体終止法

おもひいてられてよみ侍ー

ひねといふことをかくしてよみ侍ー

る係結

わつかに千七百人ぞ侍ー

はしりさわく人のみぞおほく侍ー

六〇五

一〇六一

一三〇七

一三〇八

一三〇九

一三一一

一三一二

一三一三

一三一四

一三一五

一三一六

一三一七

一三一八

一三一九

一三二〇

一三二一

一三二二

一三二三

一三二四

一三二五

一三二六

一三二七

一三二八

一三二九

かくおみてぞまかりいてにー

かくぞよみ給ー

かくぞよみ給ひー

繁昌し給へることーかたりたてまつりー

た、しはしのことなりとぞの給ー

この山にてぞ法師にはなり給にー

かくぞよみ侍ー

なをぞほと、ぞ口なくねにあかぞとしはへにー

かなしむなりとぞの給ー

あしあとの口うなるものぞ見え侍ー

とろうちつぎてぞおはしましー

こひうけたてまつるなりとぞの給ー

六波羅の地蔵へぞつねにまいりー

つちうちつぎてぞーしましー

ぬひく、みたりけるにぞたすかり給へりー

4 ける十助詞

神拝しての口りたりーに

なきはおほくもなりにーかな

御いのりなどしてつかうまつりーが

一〇〇五

一〇〇六

一〇〇七

一〇〇八

一〇〇九

一〇一〇

一〇一一

一〇一二

一〇一三

一〇一四

一〇一五

一〇一六

一〇一七

一〇一八

一〇一九

一〇二〇

一〇二一

一〇二二

一〇二三

一〇二四

一〇二五

一〇二六

一〇二七

一〇二八

御共に候——に

二二五

こもりぬ給へり——に

二二六

中堂へまいり給て侍——に

二二七

いま一度にとの給——に

二二八

出家すべしといひてかへり——が

二二九

大地獄へつかはし——に

二三〇

ほめよろこひての給——は

二三一

むかへまいらせたり——に

二三二

ふし給へり——を

二三三

つくりたてまつり侍——に

二三四

せきの一人のこりみたり——に

二三五

田を二段もちたり——を

二三六

つくりてとらせ——が

二三七

えつくらざり——を

二三八

よのほとにうえられに——かな

二三九

うえられにけるかなといひ——を

二四〇

地蔵講を行——に

二四一

は、をもちたり——に

二四二

かゝることのあるといひ——を

二四三

一度も京も見ざり——が

二四四

もてなしかしこまり給——を

二四五

百鬼夜行口あひ給へり——にも

二四六

尊勝陀羅尼をぬひく、みたり——にぞ

四〇二

一向に後世門にりりておこなひ——が

四五〇

少波珠のあり——が

四五〇

七日までなき給——口を

二〇一

「けれ」ハ已然形

1係結

人一人もなしとこそたへ侍——

六六五

うせ給へることなしとこそ日記家人々もの給——

七〇八

尤たのしみとすやしとこそその給——

二〇四

一の人こそめてたきことなり——

三七〇

おほやけこそめてたきことなり——

三七〇

おもひをかけたりごとこそかたり侍——

三七〇

2けれ十助詞

二万の人ありしところ口りとてかそへ——ば

六〇一

善宰相清行御のとひ給——ば

六〇四

輪羅おもひかへりて責誦せざり——ば

六〇六

せむむとし給——ども

六〇七

心うくかなしくおほえ——ば

六〇二

いかにかくはの給ぞと申——ば

二〇二

おほせことあり——ば

二〇三

業平中将 けて見給 — ば
 三三〇一
 北方にて めれと申 — ば
 三三〇二
 せうさもせておいり給て待 — ば
 三三〇三
 いかにせうさも給はぬぞとの給 — ば
 三三〇四
 実夢にあらざり — ば
 三三〇五
 八十まであるべしといひ — ば
 三三〇六
 出家しておこなふべしと申 — ば
 三三〇七
 おほくの仏なりとの給 — ば
 三三〇八
 仏むかしはいて給はざりしかと申 — ば
 三三〇九
 おほくの仏なりとの給 — ば
 三三一〇
 むかしも仏いて給 — ども
 三三一〇
 まいりあはざり — ば
 三三一〇
 功德はあるべからずやと申 — ば
 三三一〇
 あやしみてとひたてまり — ば
 三三一〇
 駈ぬしおもひみるに かり — ば
 三三一〇
 家にかへりてみ — ば
 三三一〇
 しなんとし — ば
 三三一〇
 みのくにくしくしゆき — ば
 三三一〇
 くれなひのはかまをとらせたり — ば
 三三一〇
 こまかに見 — ば
 三三一〇
 あなかちにあはれみ — ば
 三三一〇
 かくはし給ぞとひ — ば
 三三一〇

とらせべき人もなかり — ば
 三三一〇
 なきぬたり — ば
 三三一〇
 かくはなけき給ぞとひ — ば
 三三一〇
 いみあぎけるまにまいりて見 — ば
 三三一〇
 まつりかへむといひ — ば
 三三一〇
 これをみるにかなしくおほえ — ば
 三三一〇
 ころし給へといふぬかをつき — ば
 三三一〇
 御堂にまいりて見 — ば
 三三一〇
 そのかすくしていり給 — ば
 三三一〇
 とりはたつやうにおほえ — ば
 三三一〇
 かしてまりてとらせ給 — ば
 三三一〇
 白鷺のなかり — ば
 三三一〇
 西鳥響すべしと申 — ば
 三三一〇
 人にとひ — ば
 三三一〇
 つみふしにぞたつといひ — ば
 三三一〇
 まこと信じてわたり — ば
 三三一〇
 本尊をまたざり — ば
 三三一〇
 本尊をこひ — ば
 三三一〇
 本尊とてとらせたり — ば
 三三一〇

こそへ係助詞



1 体言 +こそ

おときみ — は民部卿長家とておほすめれ 一四〇

おときみ — はわろしと申し、定(略) 北方にて 一四〇

めれ

一五〇

一の人 — めてたきことなりけれ

一五〇

おほやけ — めてたきことなりけれ

一五〇

2 連体形 +こそ

うけ給はる — あさましくかなしく侍

一五〇

3 連用形 +こそ

や之しく — おほへ侍

一六〇

てこそ

仏道をもとめて — 侍めれ

一五〇

ふるき大臣大納言にて — はおはせましか 一四〇

とこそ

人一人もなしと — こたへ侍けれ

一六〇

なしと — 日記家人々もの給けれ

一五〇

尤だのしみとすべしと — の給けれ

一五〇

をかみ給と — 申ためれ

一五〇

おもひをかきたりま — かたり侍けれ

一五〇

やすまほとのことに — 侍なれ

一五〇

ごとし

「ごどく」(連用形)

かせ求羅をますが — このみて道心をおこすべき物なり 一四〇

たこへは善見薬王の一切のやまひを滅するが — 一四〇

善提心も一切の煩惱の病を滅 一五〇

はしか花をもて千年ころもにしむといふとも栴檀香の一日におよはざらんが — 一五〇

とらへられぬさきにを口のまねをせんが — (略) 一五〇

いとなみ給へぎなり

一五〇

その国の大地振動するが — (略) 魔王振動する

一五〇

なり

一五〇

父の子をおもふが — はくくみ給

一五〇

親尊を父の — にたのみたてまつりて

一五〇

かくの — して

一五〇

いふが — にまつりかえつ

一五〇

余の花のあさやかなるにはすくれたるが — わ

一五〇

が弟子も(略)かくのごとし

一五〇

奄羅菓の生することかたきが — (略) 人信力を

一五〇

いたさされば又々かくのごとし

一五〇

「ごとし」(終止形)

一五〇

心は野馬の —

一五〇

又々かくの —

一五〇

よひのなつまの —

一五〇

名所をのくなきがー

五三

をしのなくまねをするがー

二〇〇

つかひをえてきたる人のー

二七〇

喩ば人薬玉子のー

二〇一

病をいやすこと存生のー

四〇一

またくかくのー

四二〇

ゆめまほろしのー

三三〇

悩むること智興がー

三六〇

【さ】

【さす】(使役)

【さする】(連体形)

目はト笠せーに

三二〇

【さす】(尊敬)

【させ】(連用形)

うちつゝさ六月ばかりにうせー給にき九老

御契よりぞりー給て

【し】

し(間投助詞)

なをーすくれたり

二〇〇

【じ】(終止形)

十六分におよはーと

三〇〇

正覚をならーと

三六〇

して(格助詞)

八人の菩薩ー極楽へおくらん

二六〇

して(接続助詞)

1 形容詞十して

家たのしくー七宝にともしからず

一〇〇

妻室かたちよくーかたきもはなれかたし一八〇

天にうまるゝものなくーあくたうにをちて

二四〇

行者のくふべき物なくーしなんとしければ

二六〇

いまたとしわかくーならふ所の正教いくはく

三三〇

2 形容動詞十して

菩提の善友におろそかにー煩惱の悪縁にした

四〇〇

しめる

薫香妙にーつねに聞敷せり

一〇〇

万物にかすかにーいかにかくはの給ぞ

一〇一

維那のおろかにー外僧をあなつりし

四三〇

る助動詞十して

万法は心の所 □ — 心のほかに別の法なし

とけず — すまゆくに 六〇四

本意をとけず — 鎮西にして崩給ぬ 七〇一

十善のあるしと — 四海の土産にあきみち二〇四

本意をとけず — やみぬ 七〇五

臨終正念 □ — 生死の苦輪海をわたるべきなり 三三〇

臨終正念に — ころし給へ 三三〇

あさむかむ — 帰依をいたすべきなり 四三三

鎮西に — 崩給ぬ 七〇二

ひえのやまに — かくぞよみ侍ける 二六〇

劫婆樹のもとに — 十世界の諸仏菩薩あつま 三〇一

り給へりし中に 三〇一

す

「す」(尊敬)

「せ」(連用形)

一度にかくはかなくなら — 給ことも 九〇七

かしてまりてとをら — 給ければ 三〇四

「す」(使役)

「せ」(連用形)

御願身に人ほらは — て 三〇四

す

「ぞら」(未然形)

梅檀香の一日におよは — んがごとく 二〇八

いかゞたのみをかけたてまつら — ん 二〇四

あに三宝をいのら — んや 三〇六

「す」(連用形)

とけ — してすまゆくに 六〇四

本意をとけ — して 七〇一

公達にもおとら — やさしくこそおほえ侍 二〇四

利益もあさから — 侍 三〇一

法師といふものをあさむか — して 三〇三

「ぞり」(連用形)

貢調せ — ければ 六〇六

中有のやみまは □ — さ — き 二〇一

はるきてもとほれ — けるやまさこそ 二〇六

奥夢にあら — ければ 二〇四

仏むかしはいて給は — しか 一〇三

まいりあは — ければ 一〇四

もし仏よにいてたまは — せば 三〇四

□まをえつくら―けるを

一度も京も見―けるが

仏ばかりの人はおはしまえ―けり

本尊をもた―ければ

「す」(終止形)

1 終止法

人木石にあら―

童子の實にはあら―

道心をおこそ―

申べきにあ口―

若葉之―

かそへ申におよひ侍―

こまかに申におよひ侍―

家をいて給にあら―

□とは申□お口ひ侍―

願をとけ―

七宝にもしから―

よろこび給は―

うらみ給は―

うとみ給は―

にくみ給は―

三三〇

三三六

三三七

四五五

二四〇

三〇四

三〇一

三〇一

五〇五

三〇一

三〇一

九三〇

二二〇

一四〇

一七〇

一七〇

一八〇

二二〇

二〇四

三三〇

二二〇

うやまひ給は―

あてむき給は―

臨口正念なら―

口立にあら―

この僧なかく見え―

悩乱すること前後をしら―

いのるともいくべから―

申ひらくにをよひ侍ら―

おさなしとてかろむべから―

ちぬさし口あはつるべから―

未采の教主とおもは―

極樂にむまれおといふことあるべから―

2 十助詞

あやしむべから―とおもひて

功德はあるべから―やと申ければ

やまうをいやさ―といふこと口し

一國病を治せ―といふものなし

一切のほむなうの病を治せ―といふものなかり

如來の金言にあら―や

正教いくはくなら―といへども

極樂にむまれ―といふことあるべからず

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

二二五

「ぬ」(連体形)

1ぬ十体言

よそにおもへるは侍ーものを

あらーことになりて

つゆのーのさきーさきに

とらへられーさきに

あざからー御道心なり

2ぬ十助詞

四位五位などの人にもしられーは

そてふりしはるのにわともみえーかは

いかにせうさもし給はーぞ

はちすのうへにのほらーはなし

「ざる」(連体形)

あひかたき仏法を修行せー

いまたすてあはれーなり

りまた出家せーほとは

出離の期をしらーなり

臨終正念ならーがゆへに

「ね」(已然形)

申にふか入侍るーども

た水とてもとまりはつぎおならーど

八〇

九四

〇〇

二〇

一五

七〇

九〇

五〇

四〇

四一

一六

九一

五五

三三

四二

五五

八五

二二〇

三三〇

四四〇

五六〇

ぞ

文中

うらみやすらんまたとーはーば

かはれとはいはーども

鳥は室としらーども

「ぞれ」(已然形)

信力をいたさーば

て

虚空にみちてーあらましといひ

悪にはすゝめることにてー侍める

わつかに千七百人ー侍ける

むけにあらはにー侍める

はしりさわく人のみーおほく侍ける

まつはさきたつ人ーかなしき

めをとろきてー侍べき

なげきかなしめ口いろにてー侍し

かくよみてーまかりいてにける

七分がーにーあたると申て侍める

かくーよみ給ける

かくーよみ給ひける

わすれてはゆめかこーおもふ

二二〇

三三〇

四四〇

五六〇

七〇

九〇

五〇

四〇

六〇

六〇

八〇

九〇

九〇

三〇

四〇

五〇

六〇

七〇

た、しはしのことなりと一の給ける 一五ウ
 この山にて一法師にはなり給にける 一五ウ
 かく一よみ侍ける 一六ウ
 やまかつとなりてもなを一ほと、き 一六ウ
 怖魔と一申べきにて侍 一六ウ
 かはしむなりと一の給ける 一七ウ
 かなしむこゑをのみ一きかましとなり 一七ウ
 大般若經に一申ためる 一七ウ
 あしあとの口うなるもの一見え侍ける 一八ウ
 とろうちつきて一おはしましける 一八ウ
 こひうけたてまつるなりと一の給ける 一九ウ
 地藏へ一つねにまりりける 一九ウ
 つちうちつきて一しましける 一九ウ
 地藏の驗記に一申ためる 二〇ウ
 ことほりに一侍べき 二〇ウ
 たのもしく一侍める 二〇ウ
 まことにたのもしく一侍べき 二〇ウ
 返々たのもしく一侍 二〇ウ
 現世にもめてたく一侍める 二〇ウ
 ぬひく、みたりけるに一たすかり給へりける 二〇ウ
 このよにはありがたく一侍 二〇ウ

つふふしに一たつ 四〇ウ
 これ一本尊 四〇ウ
 正文末
 天、人のわろくてしぬる一 一〇ウ
 文選と申ふみには(略)と申たる一かし 一〇ウ
 安元々年などもあさましく侍しとし一かし 一〇ウ
 いかにかくはの給一 一〇ウ
 いかにせうさもし給はぬ一 一〇ウ
 これたれがちから一や 一〇ウ
 の給けるは(略)とはの給一かし 一〇ウ
 いかなる人のかくはし給一 一〇ウ
 なにことをかくはなけ給一 一〇ウ
 無情の僧を施すべしとはかき給一かし 一〇ウ
 そら
 今生一すくふこと 一〇ウ
 おのすへに一かく侍めれば 一〇ウ
 だに
 行基菩薩一思わつらひて 一〇ウ
 しはし一一人かたく見ゆるよのなかに 一〇ウ

たり(完了)

「たり」(未然形)

堂ドウにすへたてまつり—ん功ク徳トク

衣イをそめ—んもの

衣イをぎ—ん法師フシ

「たり」(連用形)

神カミ拝イハしての口クチり—けるに

僧ソウのまねをし—し

あまのけさをぎ—し

すへにのりをきくことをえ—ぎ

あかへまいらせ—けるに

一人ヒトのこりる—けるに

くれなひのはかまをとらせ—ければ

田タを二段ニダンもち—けるを

は、をもち—けるに

なきぬ—ければ

仏ブツにおもひをかけ—き

華勝陀羅尼カクシヤニをぬひく、み—けるにぞ

とらせ—ければ

「たり」(終止形)

1 終止法

三〇七

四〇〇

四〇一

六〇四

五〇二

五〇四

五〇五

五〇六

三〇一

三〇二

三〇三

三〇四

三〇五

三〇六

四〇二

四〇三

四〇四

四〇五

たましひは猿イヌにに—

百千ヒャクセンの塔トウをつくるにすくれ—

金如意キンニイ珠ジュすくれ—

菩提ボジの功徳クツトクすくれ—

なをしすくれ—

暁アキのつゆにに—

荒癡アウチの地チとなり—

多守護タシヨ人ニをつけ—

仏ブツの御弟ミケ子コとなり—

いのちをいき—

劄ワカ記キにみえ—

おほやうは法ホウ花カ經キョウにきはめ—

た、我ワを饗キヤウし給タマフなりと見え—

2 たり+助詞

それゆへに道心ミチココロおこし—と

とリ—と

「たる」(連体形)

1 たる+体言

つかひをえてぎ—人

りて給タマフ—時トキ

出家イッシャし—もの

七度シチタビ還俗エンゾクし—物

一〇三

二〇三

二〇五

二〇五

二〇七

四〇五

五〇〇

五〇〇

六〇七

五〇二

五〇〇

三〇三

四〇四

三〇〇

三〇六

三〇七

三〇四

一〇四

一九〇

一九〇

一九〇

七度出家し—功徳
馬やにた□—馬
おとこあはせ—女
上衣き—わらは
老—女

2 準体法

六軍比丘が威儀をわすれ—
たれが観音の來迎をばれ—はある

る たる十助詞・助動詞

永觀律師は(略)とは申—なり
文選と申ふみには(略)とは申—ぞかし
怖魔とは申—なり

をかみ給とこそ申—めれ
涅槃經にも申—めれば

みつから子を口ろすなど申—めれば
大聖若經にぞ申—める

地蔵の驗記にぞ申—める
極樂のやうにしたて—に

まめかるなんぞ申—めれば
すくれ—がごとく

「たれ」(已然形)

法花經六卷のはし□も(略)とおほせられ—

三〇オ

二六エ

二九オ

二九オ

三〇オ

二二オ

三〇エ

三〇一

八〇六

一九オ

三〇オ

三〇エ

三〇エ

三〇オ

三〇エ

三〇エ

四〇エ

ば

たり(断定)

「と」(連用形)

十善のあるし—して



「て」(未然形)

この□はつくりてくれ給—まし

「て」(連用形)

ひぎいたしてとらせ—けり

ことうけ□給—き

「つ」(終止形)

まもる人見つけてとら—へ

いふがごとくにまつりか—

そこそはくの簡をやきうて—

玉—合てすて—

きの枝—をとし—

「つる」(連体形)

ふるさとのたひねのゆめと見え—は

「つれ」(已然形)

二九エ

二九エ

三〇エ

二九エ

三〇エ

三〇エ

二二エ

三〇エ

三〇エ

四〇エ

二九エ

菩提心の玉をみにかけーば

一〇三



て

1 動詞・補助動詞連用形十て

道心をおこしー出家道世して

一〇二

出家道世しー仏道をもとむべし

一〇一

しつめー道心をおこせ

一〇〇

なつけー仏道をもとめよ

九九

このみー道心をおこすべき物なり

九八

道心をこのみーすみやかに名利をはなるべきなり

九七

いはんやなかく道心をおこしー仏道をもとめむ

九六

人をや

九五

功德をばほめ給ー待めり

九四

住水宝珠をかさりー木にいれば

九三

つゝしみーうたかひをなすことなかれ

九二

十方国土を灰となしーその国の木草としり

九一

木を海にいれーそのかほの木とはしるともえら

九〇

もし人おしー須弥山のやうなるをこすへたてま

八九

仏をつくりー須弥山のやうなるをこすへたてま

八八

つりたらん

八七

虚空にみちーであらまし

一七二

師子の座よりをりー光明をはなちて

一七一

光明をはなちーおかみ給なり

一七〇

衆にふけりー道心をお□す

一六九

世路をわしりー出家の心なし

一六八

思わつらひー(略)とほけき

一六七

人身をうけーあひかたき佛法を修行せざる

一七六

たとひをとりー申べきにあ□す

一七五

白鷺池は水たえーうえきしけり

一七四

菩提樹は樹をはなれー若葉さゝお

一七三

男せ大少をあはせー九人になれり

一七二

神輝しーの□りたりけるに

一七一

二万人にかすそひーあるよしをいはひて

一七〇

かすそひてあるよしをいはひーよめるなり

一六九

新羅国をうちとり給ー(略)講文などめして

一六八

講文などめしーかへり給にけるのち

一六七

おもひかへりー貢調せざりければ

一七六

くしたてまつりーせめ給けり

一七五

長者をめしー(略)吉志舞をおほせらる

一七四

ひそかに楓取をめしーはらみ給ぬ

一七三

六月なりーは持て好言録「きみ又うせ給ぬ

一七二

一七六

千年万年あらんずるやうにあもひーおほくのつ
 かさあきぬとて 一〇二
 何遅にほこりー速なることをうらむる 一〇三
 いひーなかめし人もいつらは 一〇四
 めをとろぎーぞ侍べき 一〇五
 天下くれふたかりーまやふ人のうつり給しゆふ 一〇六
 へにかはることなく 一〇七
 あらぬことになりー南殿のみすをはしめて九宮 一〇八
 南殿のみすをはしめーおひたゝしくなりにし 一〇九
 ば 一〇一〇
 としころ御いのりなどしーつかまつりけるが 一〇一一
 まいりーかくよみてぞまかりにてにける 一〇一二
 かくよみーぞまかりにてにける 一〇一三
 名利をすてー後世の資糧をまうけ給べきなり 一〇一四
 七分が一にぞあたると申し侍める 一〇一五
 たとひをもてをしへーのたまはく 一〇一六
 蓮花をひとふさえー玉のかつらにさすをもて 一〇一七
 これをゝもくしー多守護人をつけたり 一〇一八
 花をもてあそひー鳴たわふるゝことあり 一〇一九

蓮花をぬすみ非とらむとおもふ 一一〇
 あやしむべからずとおもひーぬすむほとに 一一一
 まもる人見つけーとらへつ 一一二
 死ーのちに善を修するは 一一三
 出家遁世しー仏道をもちめて 一一四
 仏道をもとめーこそ侍めれ 一一五
 十善の位をすてー仏法に帰し給ぎ 一一六
 出家遁世しー(略)よろこひ給 一一七
 出家遁世しー(略)よろこひ給 一一八
 あやしみーいはく 一一九
 出家遁世しー七宝にともしく 一二〇
 国王をはしめたてまつりーおほくきこゑ侍めり 一二一
 出家遁世しー所々に修行し給 一二二
 法師になりー御共に候けるに 一二三
 いねといふことをかくしーよみ侍ける 一二四
 政をすてー清涼紫宸の玉のすたれをりて 一二五
 玉のすたれをりてーはるかに那智のやまにこも 一二六
 り 一二七
 御心ちわつらひー(略)そのほとりにあふきふ 一二八
 して 一二九

いそのほとりにあふきふしー四府陣をかため

劍聖をとりに前後にしたかひしこと
一三三六

おもひひて給ーかくぞよみ給ける
一三三九

法師になりーこもりぬ給へりけるに
一三四〇

業平ノリヒコ見給ければ
一三四一

わすれーはゆめかどぞおもふ
*一三四三

ゆきふみわけーきみをみむとは
*一三四四

道心おこしー出家遁世して
一三四五

出家遁世しー多武峯にこもり給
一三四六

道心をこしー出家遁世する人なり
一三四七

としをいおとろえー家をいて給にあらむ
一三四八

た、菩提心をおこしー仏道をもとめためなり
一三四九

や、ほとと入ー延暦寺の房にまかりて
一三五〇

延暦寺の房にまかりー(略)かたりたてまつりけ
一三五〇

る
一三五〇

君達あま中入まもり給ー侍けるに
一三五〇

せうさもせでねり給ー侍ければ
一三五〇

おこなひしーいかにせうさもし給はぬぞとの給
一三五〇

ければ
一三五〇

の給けるにあはせしこの山にてぞ法師にはなり
一三五〇

給にける
一三五〇

道心をこしー出家遁世して
一三五〇

出家遁世しーみえのや住し
一三五〇

靈山にこもりぬーかくぞよみ侍ける
一三五〇

はるぎーもとはれざりけるやまさとを
*一三五〇

やまかつとなりーもなをぞほと、き口
*一三五〇

大原にこもりぬーかくぞよみ侍ける
一三五〇

ちりつもるみちをわけぎーよそにみば
*一三五〇

けうとむ比丘尼のあとをおひー仏道をもとめ給
一三五〇

けり
一三五〇

つかひをえーきたる人のごとし
一三五〇

わかより道心ありー出家の心さしありとりへ
一三五〇

ども
一三五〇

ものさはかしとおもひーすくすほとに
一三五〇

かなしき子なんどいてぎーこれをすて、は三を
一三五〇

これをすてーはいかてかよをすつることはあら
一三五〇

ん
一三五〇

りのちなか、るべしと見ーそれをたのみてまを
一三五〇

それをたのみーひさしくよにあらんすれば三を
一三五〇

相人にみえー八十まであるべしといひければ
一三五〇

出家しー十年おこなひて
一三五〇

十年おこなひ一後世の資糧とせんとおもふほと
 四馬のたとひぞおもひ一とく三車にのり給べき
 一人の梵士まうて一仏よにりて給たる時
 出家せし一おこなふべきなり
 出家せし一おこなふべし
 彌勒をはしめ一おほくの仏なり
 さらばその時出家すべしといひ一かへりけるが
 俱留孫仏をはしめ一おほくの仏なり
 出家せし一仏の御弟子となりたり
 はやくかの梵士のおもひをなし一たま
 にあひたて一ひ
 出家せし一淨土をもとめ給べきなり
 波羅門さけにゑひ一僧のまねをしたりし
 仏の御子となり一なかく魔王のぬひをはなる
 罪により一地獄にをつ
 けまのかふりをかたふけ一をかみ給
 大悲心をおこし一出家せせむもの
 三宝を信したてまつり一仏になるべし

空王仏を拜し一仏道をなり
 花経をつとめ一正覚をなり
 三宝を信し一仏道をいのり給べし
 信をいたし一淨土をもとめ給べきなり
 あはれみ一父の子をおもふがごとくはくくみ給
 たのみたてまつり一無上菩提をいのり給べきな
 り
 祇洹精舎をつくり一たてまつりしをもよるこひ
 給はず
 仏道にけれ一差別あることなかりき
 善根を修し一羅睺羅のやうにおもはれたてまつ
 りて
 羅睺羅のやうにおもはれたてまつり一仏道をな
 り給べし
 なみたをなかし一七日までなき給けるを
 あやしみ一とひたてまりければ
 父のおもひをなし一なを仏道をならむと申べき
 なり
 いま淨土ありとしり一ねかひ
 悪道ありとしり一いとひ
 冥より冥にいり一なかく出離の期なからむもの

かくのごとくしー(略)治せずといふものなし 二五〇

死のためにをかざれーかはねをつかのうちにう 二五〇

つむ 二五〇
智心ありー病人を相具して 二五〇

病人を相具しー塚のほとりにのそみて 二五〇

塚のほとりにのそみー死骸をみにふるゝに 二五〇

正覚なりたましーのりとき給し時 二五〇

梅影のほり給ーのちは 二五〇

舍利をのこしー一切衆生のほむなうのやまひを 二五〇

のそひ給 二五〇
一代教主におもひをかけー仏道をばいのる口き 二五〇

なり 二五〇
釈迦の恩徳をほめよろこびーの給けるは 二五〇

くをのみうけー人にむまるゝ人もなく 二五〇

あくたうにをちーくをのみうけて 二五〇

くをのみうけーかなしむこゑをのみそきかまし 二五〇

となり 二五〇
医王の薬をこつす 二五〇
給 二五〇
薬師如来を称念しー仏道をいのり給べし 二五〇

着婆が薬のがめをにきりーむまれ 二五〇

薬師如来をたのみたてまつりー仏道をばいのる 二五〇

べきなり 二五〇
療病院をつくりー薬師の形像を安置し 二五〇

延暦寺をたてー医王の尊容を本尊とす 二五〇

身を三十三に変しー十方の衆口をみちみぎ 二五〇

形を六種に現しー五道の群衆をすくひ給 二五〇

大口の誓願をあふぎー往生極樂をねかひ給べき 二五〇

なり 二五〇
観音ひちをのへー金蓮台にのせ給なり 二五〇

大悲の悲願をあふぎー来迎弘攝をまち給べきな 二五〇

り 二五〇
仏師にかはりー射られ給ひ 二五〇

猪になりー行者にくはれ給 二五〇

女に交しーぬしにおとこあはせ給 二五〇

童にあらはれー人をいのり給ふ 二五〇

仏師にかはりーいられ給といふは 二五〇
観音をつく口せーむかへまいらせたりけるに 二五〇

やまにゆきあひー仏師をまちうけて
 三六四
 仏師をまちうけーいころして
 三六四
 いころしー馬をばとりてかへりぬ
 三六五
 馬をばとりーかへりぬ
 三六五
 家にかへりー見ければ
 三六六
 猪になりー行者にくはれ給といふは
 三六八
 大雪にふりこめられー行者のくふべき物なくし
 三六九
 て
 ぬのしゝになりーふし給へりけるを
 三七〇
 わきのしたのしゝを口口とりーくひて
 三七一
 くひー口のちをいきたり
 三七二
 女になりーおとこをあはせ給といふは
 三七三
 ちゝはゝみなうせーのち
 三七四
 女いてきーよきおとこあはせて
 三七五
 よきおとこあはせーみのゝくにへくしゆきけれ
 三七六
 ば
 よろこひーくれなひのはかまをたらせたりけれ
 三七八
 ば
 よろこひーいぬとおもふほとに
 三七八
 くれなひのはかまをかけーたちたまへる
 三七八
 〇り
 三七八
 わらはに愛しーいのりやめ給ことなり
 三七八

観音をあふぎたてまつりーゆめくうたかひを
 三九七
 はずことなかれ
 三九七
 地蔵菩薩口よひはなち給ー未來惡世の衆生をば
 三九八
 ばにふそくす
 三九八
 無虚妄のさきらをひらきーうけ給はりぬ
 三九八
 身を二十五にちらしー二十五拍をすくひ
 三九九
 あるい〇なりー中有のたひ人をやとし
 三九九
 焰魔王となりー罪人をたすけ
 三九九
 持天帝釈となりー惡業をたため給
 三九九
 菩薩苦にかはりー地獄におち給
 三九九
 地獄のとほそにのそみー一切の罪人をとひらひ
 三九九
 給
 三九九
 地蔵をもとめーおこけといふものに入れ
 三九九
 おこけとりふものに入れーくひけるものゝさは
 三九九
 を
 三九九
 子なりけるおとこのつくりーとらせけるが
 三九九
 えつくらざりけるをたけきー(略)といひて
 三九九
 この口はつくりーくれ給てまし
 三九九
 (略)といひーふせりける女の〇て
 三九九
 女の〇ーぎければ
 三九九
 どううちつきーぞおはしましける
 三九九
 もいなんどもえーくはむとおもひて
 三九九

くはむとおもひー講衆コウシュウにいりぬ 三三〇

やうくとしつもりー色紙シキジすきはなくわつら 三三一

ひて 三三二

はかなくわつらひーうせにけり 三三三

とらへからめー焰魔王宮エンマウキウへゆきぬ 三三四

一人の僧ソウいてぎー焰魔王エンマウにこひう口て 三三五

焰魔王エンマウにこひう口ーねんころにかたらひて 三三六

ねんころにかたらひーかへるべき道ミチなどをしへ 三三七

て 三三八

道ミチなどをしへーあなかちにあはれみければ 三三九

とかくしーとらす人もなかりければ 三四〇

た、ひとりまもらへーなきぬたりければ 三四一

僧ソウ一人きたりー(略)と、ひければ 三四二

いひけるをき、(略)とてかきおいていてにけり 三四三

かきおいていてにけり 三四四

いみあぎけるま、にまいりー見ければ 三四五

つちうちつきーぞ、しましける 三四六

法ホウ花カ經キヤウの咒ジュをよみーみちひき給けむ 三四七

火ヒの車クルマをくしーからめとらむとせんととき 三四八

劍ケン口コふりーふせき給はむことを 三四九

明王メイオウにおもひをかけー淨刹ジュツシャクにおくられたてまつ 三五十

るべきなり 三五一

せなかにをひー都率トソツの内院ノウエンにいたり 三五二

船フネにあらはれー流球リウキウの鬼オニ鞭ムチをまぬかる 三五三

病患ビヤウオンをうけー悩ナウ乱ランすること前後ゼンゴをしらす 三五四

清セイ明メイを請シヨウしー且ナド口コ祈イノチ請シヨウし 三五五

經論キヤウロンをばおもくしー師シにかはらむと申人シヤウジンあらは 三五六

病ビヤウのせむるま、にめを見まわしーみるに 三五七

師シにかはりー後ゴ庄シヤウに三宝サンポウのあはれみをもかから 三五八

むとおもひて 三五九

あはれみをもかからむとおもひー我師ガシにかはり 三六〇

たてまつらんといふ 三六一

なみたをうかへー觀クワン喜キのいろをあらはす 三六二

すかたを見えーかへりきたるべしといひて 三六三

かへりきたるべしといひてぬ 三六四

このことをき、(略)全ゼンゆるすことなしといへども 三六五

こしらへいひなく、かへりきたりて 三六六

なく、かへりきたりーすてに師シにかはる 三六七

重チウ病ビヤウをうけとりー悩ナウ乱ランすること智チ學ガクがごとし 三六八

繪エ像ゾウ不フ動ドウ尊ソンにむかひー(略)といふぬかをつきけ 三六九

くれぬぬあまみたをなかしー(略)との繪て

(略)との給一証室やまひやみ

大聖明王におもひをかかけー二世の頼口いのり

給やし

京にのほりー御堂にまりりて見ければ

御堂にまいりー見ければ

前駈そのかすくしーいり給ければ

内大臣左大将 教道 とのをはしめたてまつりーゆ

ろつの人

かしこまり給けるを見ー一人にこそめてたきこ

となりけれと

陣をひきー丘右の樂屋より乱声奏して

乱声奏しーとりはたたつやうにおほえければ

御輿よりをりさせ給ー(略)かしこまりてをら

せ給ければ

まなしりをならへーおはしましける御まへ

御りやうのそてをあはせーかしこまりてとをら

せ給ければ

かしこまりーとをらせ給ければ

おはしまさーりけりとおもひなりーいよく

におもひをかかけたりき

聖人のおもひをなしー諸仏におもひをかけて

諸仏におもひをかけー仏道をばねかひ給べきな

去を信しー仏になるべし

風にふかれー聖縛が廟にかゝりぬ

地獄のかなへわれー清涼の池となりぬ

七宝の蓮花ひらけー苦患をまぬかれぬ

高きみねにのほりー見るに

功德によりー極樂に往生すといへり

百鬼夜行にあひー(略)鬼難をまぬかれ給ひ

尊勝陀羅尼をみー鬼難をまぬかれ給ひ

一期の運命つろー珠應王宮にめされぬ

鉄の簡をつみー冥官の前にひきいたせり

猛火となりー罪業のそこそはくの簡をやきうて

雲をおこしーあめをそゝくがゆへに

玉倉ーすてつ

これを見ーつかみてつきころして

これを見てつかみーつきころして

つかみてつきころしーきの枝よりをとしつ

これを見ー白鷺のおむにほうせんとし給に

智臣申一はく

四三〇

舍利井につけの給はく

四二七

須達長寺よりくすへ

四三六

若大大臣はゆをわかしあむしき

四三〇

太子につたへあこたることなく

四三〇

三密を信し往生をねかはん人

四三〇

恒河の水いて心かくりけるとき

四三〇

わたるべきことありこのかはをわたりなんや
と人にとひければ

四三〇

輕慢しつふふしにぞたつとりひければ

四三〇

まこと信しわたりければ

四三〇

輕病をうけ盲目になりけり

四三〇

一向に後口門にいりあこなひけるが

四三〇

山寺にゆき本尊をこひければ

四三〇

輕慢し白紙を一枚(略)とらせたりければ

四三〇

仏なめりと信しあこなひたてまつりて

四三〇

あこなひたてまつり現身にまなこひらけて

四三〇

現身にまなこひらけ後世にわう庄のさうをあ

四三〇

らはずなり

四三〇

2 形容詞連用形にて

たゝわろくしぬるぞ

八〇一

このどのわかく父の御ともに

五三〇

御としわかくけうとむ比丘尼のあとをおひて

五三〇

かならずわかく出家遁世すべきなり

五三〇

あまりにわかく出家をとけむこと

五三〇

馬はなくこの観音にやをいたててまつれる

五三〇

ことなり

五三〇

あさましくもしわがたのことかとして

五三〇

3 助動詞連用形にて

悪にはすゝめることにぞ侍める

四三〇

仏法ほろほされ諸寺諸山みな荒廢の地となり

四三〇

大金国にとられ名所をのくなきがごとし

五三〇

天智天皇の春宮にーおはしますを

五三〇

まぬかるまじぎことにー侍ものを

六三〇

なげきかなしめるいろにーぞ侍し

六三〇

一天下の国母にーおはしまししかば

六三〇

諫問おほせきたされー京の人くるからすには

六三〇

り侍にき

六三〇

御賀のまひこらんなどおもひいてられよみ侍

六三〇

ける

六三〇

とらへられーのちをしのなくまねをすれども

二一六

とらへられー後をしのなくまねをするがごと

二一七

し

おもひひてられーかくぞよみ給ひける

二一八

女三人に男三人と申は

二一九

太郎には關白左大臣頼一なり

二二〇

二郎には内大臣左大将兼一なり

二二一

おとこに申おはせましかば

二二二

ふるき大臣大納言にこそはおはせましか

二二三

後には土御門右大臣と申北方に

二二四

〇めれと

二二五

怖魔とぞ申へきに侍

二二六

雲山にゐられー侍めれ

二二七

人に申おはせましかば

二二八

宇治殿頼一の關白左大臣に願主の御子にて

二二九

願主の御子に一人番長の御隨身に人ほらけ

二三〇

せて

二三一

人はらはせし四位五位の前駈そのかすくして

二三二

り給ければ

二三三

で

あまりのことに轉慢して

四三

せうさもせーねりり給て侍ければ

四五

なくねにあがーとしはへにける

四六

りかてかかたざりたてまつらーは侍らん

四七

との格助詞

上語もしくはそれに準ずるものを承ける

道心ト口ふは

菩提心ト口ふは

無上尊トなる

灰トなして

この国の木草トしり

水トはしるとも

三教指歸ト申文には

きみトして

荒廢の地トなりたり

二万銀トなつく

公章トいふ国司の

將軍トせり

文選ト申ふみには

四八

四九

五〇

五一

五二

たれか過去の如来しる

四三〇

未来の教主もはす

四三〇

鳥は宝しらねども

四三〇

宝なりぬ

四三〇

鳥いふものを

四三〇

法師いふものを

四三〇

愚直いふものありき

四三〇

愚直まこと信して

四三〇

高土に僧強いふものありき

四三〇

2 文もしくはそれに準ずるものを承ける

仙道をもとむべし申は

四三〇

千手陀羅尼經に大誓心これいふは

四三〇

永觀律師は(略)このめばおのづから発心すは

申たるなり

たとへばせむぶく花はしか花をもて千年ころも

にしむしいふとも

つしみてうたかひをなすことほかれ説り

出生菩提心經には(略)菩提心をおこさむ功德の

十六分におよはじいへり

宝積經には菩提心の功德(略)虚空にみちてぞあ

らましといひ

秘密藏經にははしめの菩提心よく重々の十要を

のそくいはんや第三第四をやしへ三

出家功德經には(略)出家は無量の功德をうい

へり

行菩薩に思わつらひて(略)何処に

躬一なけき

弘法大師は(略)物をならぶ時は録その中にあり

二三 教指帰と申文にはかき給へるなり

一人もなし二そこたへ侍けれ

むかしもかく匡家一度にうせ給へることなし

日記家人々もの給けれ

それゆへに道心おこしたりきこゆる人もなし

何進にはこりて速なることをうらむるは申た

るぞかし

よの中にあらましかはあもふ人

とりへやまこよひもけふりのほりぬいひてな

かめし人もいつらは

一期のゆめのちの追善は七分が一にぞあたる

一申て待める

この人蓮花をぬすみてうらむあもふ心つきぬ

をしばめりとてあやしむべからずーおもひて

二〇四

存生ソンセイのあひた一善センなりーいふ

二〇五

あなたのしやーいふこゑをたかうあけて

二〇六

いかにかくはの給ぞー申ければ

二〇七

ただのしみとすべしーこそ給けれ

二〇八

歌ウタよめーおほせことありければ

二〇九

あまのもしをひたくかーや見む

二一〇

わすれてはゆめかーぞおもふ

二一一

ゆきみみわけてきみをみむーは

二一二

おと、きみこそはわろしー申し、定

二一三

後ノチには土御門ツチノミカド右大臣サダノと申マウ北方ホクホウにて

二一四

かやうのことたゝしはしのことなりーぞの給け

二一五

いかにせうさもし給はぬぞーの給ければ

二一六

いま一度イツドにーの給けるにあはせて

二一七

はななきはばーなにおもひけん

二一八

我ワガ少シヤウ出家シュツカ得トク阿ア禰ニ多タ羅ラーおほせられたれば

二一九

老オシ後のノチ出家シュツカはつかひをえてきたる人のことしー

二二〇

いへり

二二一

ある人わかくより道心ミチココロありて出家シュツカの心ココロさしあり

ーいへども

二二二

あまりにわかくて出家シュツカをとけさることものは

二二三

かしーおもひて

二二四

これをすてゝはいかてかよをすつることはあり

二二五

んーおもふほとに

二二六

或レバ人ヒトゆめにいのちなかゝるべしー見て

二二七

ひさしくよにあらんずればあまりものさはかし

二二八

ーおもふほとに

二二九

八十ヤソまであるべしーいひければ

二三〇

後ノチ世セの資シ糧リョウとせんーおもふほとに

二三一

仏ブツ又マタよにりて給ことあらばそのときに出家シュツカして

二三二

おほくの仏ブツなりーの給ければ

二三三

さらばその時出家シュツカすべしーいひて

二三四

仏ブツむかしはりて給はざりしかー申ければ

二三五

俱クニ留リウ孫ソン仏ブツをはしめておほくの仏ブツなりーの給けれ

二三六

佛ブツ塵ジンといふことはまゝとすー申ことなり

二三七

このゆへにま

二三八

七度シチド出家シュツカしたる功クワチ徳トクはあるべからずやー申けれ

二三九

焰エン摩マ大ダイ王オウたまのがふりをかたふけてをかみ給ー

二四〇

こそ申ためれ
 第一に深三宝を信したてまつりて仏になるべし
 一申は
 この仰へに三宝を信して仏道をいのり給へし
 申侍なり
 阿耨菩提は信心を因とす一涅槃経にも申ためれ
 ば
 今此三界皆是我有其中衆生悉是我子一云文云
 我觀一切普皆平等一法花經にも給はこれなり
 道心なき衆生のことをかなしむなり一その給け
 る
 なを仏道をならむ一申べきなり
 人間のおやは子をあもふ心さしつかし一いへど
 も
 しかのみならずいま浄土ありしりてねかひ
 悪道ありしりていとひ
 三宝を信すべし一しる
 みにぶるゝものやまうをいやさず一いふこと口
 し
 一國病を治せず一いふものなし

三三〇
 三三一
 三三二
 三三三
 三三四
 三三五
 三三六
 三三七
 三三八
 三三九
 三四〇
 三四一
 三四二
 三四三
 三四四
 三四五

一切のほむほうの病を治せず一いふものなかり
 善明天子の(略)の給けるは(略)但聞種々苦音聲
 一はの給ぞかし
 この文の世は(略)かなしむこゑをのみぞきかま
 し一なり
 惡病除喻乃至速証無上菩提一の給へり
 しかのみならず八人の菩薩して極樂へおくらん
 一の給へり
 浄土にままる一いふは
 あなうの觀音の仏師にかはりていられ給一いふ
 は
 とり下り一おもふ馬はなくて
 なりあひの觀音の猪になりて行者にくはれ給一
 (いふは
 かねかさぎの觀音の世になりておとこをあはせ
 給一いふは
 くれなひのはかまをとらせたりければよろこび
 ていぬ一おもふほとに
 こかはの觀音の人りのり給一いふは
 地蔵菩薩口よひははち給て(略)一日一夜なりと
 も惡道へおとし給な一の給しかば

三四六
 三四七
 三四八
 三四九
 三五〇
 三五一
 三五二
 三五三
 三五四
 三五五
 三五六
 三五七
 三五八
 三五九
 三六〇
 三六一
 三六二
 三六三
 三六四
 三六五
 三六六
 三六七
 三六八
 三六九
 三七〇
 三七一
 三七二
 三七三
 三七四
 三七五
 三七六
 三七七
 三八〇
 三八一
 三八二
 三八三
 三八四
 三八五
 三八六
 三八七
 三八八
 三八九
 三九〇
 三九一
 三九二
 三九三
 三九四
 三九五
 三九六
 三九七
 三九八
 三九九
 四〇〇

うけ給はりぬーことうけ口給てき 三五五

まことにさなめりーおほゆることども 三五五

造作五逆罪(略) 未定代受苦ーいふはこれなり 三五五

この口はつくりてくれ給てましーいひて 三五五

きのふまでつくら したのよのほとにうえら 三五五

れにけるかなーいひけるを 三五五

ものほんどえてくはむーおもひて講衆にいりぬ 三五五

いかなる人のかくはし給ぞー、ひければ 三五五

このたひ非業なれば二ひうけたてまつるなりー 三五五

その給ける 三五五

なにごとをかくはなけ給ぞー、ひければ 三五五

かゝることのあるーいひけるをぞ、て 三五五

ならふ所の経論をばおもくして師にかはらむー 三五五

申人あらば 三五五

師にかはらむと申人あらばまつりがへむーいひ 三五五

ければ 三五五

習樂無心なればかはれーはいはねども 三五五

一人もかはらむーいふものなし 三五五

ならふ所の正教いくはくならずーいへども 三五五

このだひ師にかはりて後生に三宝のあはれみを 三五五

もかふらむーおもひて 三五五

我師にかはりてたてまつらんーいふ 三五五

いま一度今生のすかたを見えてかへりきたるべ 三五五

しーいひていてぬ 三五五

母このことをぎ、て全ゆるすことなしーいへど 三五五

も 三五五

ねかかへくは明王臨終正念にしてころし給へーい 三五五

ぬかをつぎければ 三五五

われは行者にかはらむーの給て 三五五

願音地藏等菩薩は佛の分に申べしーいへども 三五五

一人こそめてたぎことなりけれーしうとまり 三五五

にけり 三五五

おほやけこそめてたぎことなりけれー又うらや 三五五

ましくなりぬ 三五五

なを仏ばかりの人はおはしまさざりけれーおも 三五五

ひなりて 三五五

いよく仏におもひをかかけたりきーこそかたり 三五五

待けれ 三五五

法を信して仏になるべしー申は 三五五

七宝の蓮花ひらけて苦悶をまぬかれぬーいへり 三五五

法身の眞言は一返を誦れば一切縁を百万返よむ
功徳にひとしいへり
三九三

大悲神咒を受持せんもの三惡道にあつゝいはッ
三九四

我ちかて正覺をならじ一の給へり
三九五

善勝陀羅尼の功徳によりて極樂に往生すゝいへ
三九六

僧は不淨なりゝいへども供養の功徳は宝となり
三九七

ぬとの給
三九八

又十輪經にいはくたとへば膽甯の花ほしほめり
三九九

ゝいへども
四〇〇

わが弟子も戒をやふるゝいふとも
四〇一

白鷗の恩を報ゝ思は口
四〇二

僧を供養せんゝ思はッ
四〇三

無憚の僧を施すべしゝはかき給ぞかし
四〇四

極樂にむまれずゝいふことあるべからず
四〇五

このかはをわたりなんやゝ人にとひければ
四〇六

つふふしにぞたつゝいひければ
四〇七

仏なめりゝ信して
四〇八

ろむとす
四〇九

九泉の底ひにおもむかんゝす
四一〇

そのゝち代々のみかとせめむゝし給けれども
四一一

あはれいつまであらんゝすらん
四一二

りつみのうへにならんゝすらん
四一三

行者のくふべき物なくしてしなんゝしければ
四一四

火の車をくしてからめとらむゝせんとき
四一五

毒虫國王をさしたてまつらんゝするを
四一六

白鷗のおむにほうせんゝし給に
四一七

たれとてもとまりはつゞきみならねゝまつはぞ
四一八

きたつんぞかなしき
四一九

二万の人ありしところロリゝかそへければ
四二〇

おほくのつかさあきぬゝはしりさわく
四二一

給ことなり
四二二

ひとたひもほもあみたふゝいふ人の
四二三

烏鷗響すべしゝいふは
四二四

たゝ鷗鳥響すべしゝ申ければ
四二五

たゝ我を響し給なりゝ見えたり
四二六

破戒の僧を口する功徳はまことにすくるゝの
四二七

給ことなり
四二八

たれ——もとまりはつゞきみならねど 三六五
をしなめり——あやしむべからずとおもひて 二二四

おとぎみこそ 三六六
まじりあることかたし——出家遊世して 二二五
国凶あらむ——はその國の大地振動するがごとく 二二六

もしわがたのことか——いそぎ 三六七
わが地蔵のし給へるな口り——見れば 三六八
やすきほどのことにこそ侍なれ——かざおいて 三六九
りてにけり 三七〇

地蔵のしたまへるなめり——いみあそけるま 三七一
にまいて 三七二
証空阿闍梨——いまたとしわかしくして 三七三
庭をもひまむ——はしめて京にのほりて 三七四
意の子をばおさなし——かろむべからず 三七五
これを本尊——とらせたり 三七六
現世の利 三七七

四年ころもにしむといふ——梅檀香の一日にお 三七八
めはどらんがごとく 三七九
そのかほかの水とはしる——菩提心の功德ははか 三八〇

とも

りかたし 三八一
仏又いて給——まじりあふことかたし 三八二
一日一夜なり——悪道へおとし給なとの給しか 三八三
ば 三八四
いのる——いくべからず 三八五
地獄の中なり——阿防羅刹もいかてかかたざり 三八六
たてまつらでは侍らん 三八七
戒をやふるといふ——またくかくのごとし 三八八

とも

うて——さることほく 三八九
つなけ——とまりかたし 三九〇
申におよひ侍らね——一のせうをいたし侍べし 三九一
かくまとへる所なれ——二万人にかすそひてあ 三九二
るよしをいはひて 三九三
せむむとし給けれ——とけずして 三九四
いにしへもたまのうてなは見しか——いつかは 三九五
そてにつゆはこほれし 三九六
をしのなくまねをすれ——全ゆるすことなし 三九七
仏いて給けれ——まじりあはざりければ 三九八

極樂のやうに侍たるに

2 体言十に十補助動詞

人木石一ならず

童子の貴一はあらず

大師の口立一あらず

親音の垂跡一あ

如來の金言一あらずや

3 体言十に十助詞

臨終正念一して

やすきほとのこと一こそ侍なれ

ことはり一ぞ侍べき

臨終正念一して

(に十て)

悪にはすゝめること一てぞ侍める

天智天皇の春宮一ておはします

生死の無常はたれもまぬかるまじきこと一て侍

ものを

なげきかなしめるいろ一てぞ侍し

一天下の国母一ておはしまししかば

男子六人女子六人一て

大郎一ては左大臣一なり

二郎一ては内大臣一左大将一なり

三〇一

二〇八

三〇七

三〇一

三〇二

三〇八

三〇四

三〇四

三〇四

三〇四

三〇三

三〇七

三〇八

三〇四

三〇二

三〇二

三〇二

三〇三

三〇四

おとこ一ておはせましかば

ふるき大臣大納言一てこそはおはせましか

御門右大臣と申北方一て

怖慮とぞ申べき一て侍

人一ておはせましかば

守治殿親一の関白左大臣一て

願主の御子一て

あまりこと一て車慢して

4 活用形十に

たとひぞとりて申べき一あらず

處をりて給一あらず

「なり」の終止形

1 体言十なり

たしがの往生の因一

道心といふは菩提心一

菩提心といふは大悲心一

大悲心これといふはすなわちこれ一

心はこれ第一のあた一

このみて道心をおこすべき物一

菩提心のたふときゆへ一

そのこりまの広田明神一

ゆめのうちの榮花一

三〇七

三〇八

三〇七

三〇一

三〇六

三〇六

三〇六

三〇四

三〇八

三〇三

三〇三

三〇六

三〇六

三〇七

三〇一

三〇七

三〇八

三〇六

まほろしのあひたの化衆一 一〇六
 摩訶陀国の王一 一〇七
 冷泉円融院の御をち一 一〇八
 道心をこして出家進せする人一 一〇九
 た、菩提心をおこして仏道をもちめむため一 一一〇
 御堂公暲十二人一 一一一
 太郎にては関白左大臣頼一 一一二
 二郎にては内大臣左大将頼一 一一三
 実には末子一 一一四
 一品宮御母一 一一五
 後三条院御母一 一一六
 三若は後一条院右皇女二人母一 一一七
 二条院後三条院皇后宮一 一一八
 四若は後朱雀院右後冷泉院御母一 一一九
 まことにあさからぬ御道心一 一二〇
 伊賀守為業は法名寂念一 一二一
 長門守為経は法名寂超一 一二二
 志岐守頼業は法名寂然一 一二三
 比丘とは持語一 一二四
 怖魔といふことはまを、とすと申こと一 一二五
 けまた出家せざるほとは魔王の奴婢一 一二六

綱維後一 一三〇
 (略)悉是吾子と云文たかふことほき物一 一三一
 法花経にも給はこれ一 一三二
 僧祇苦行も濁世のわれらため一 一三三
 延暦寺は九条右丞相の建立一 一三四
 聖徳には施無畏の菩薩一 一三五
 南海のほとりには(略)千手一 一三六
 やをりたてたてまつれること一 一三七
 上衣きたるわらはに變していのりやめ給こと一 一三八
 我等衆生がふかくたのみにてまつるべき菩薩一 一三九
 造作五逆罪(略)決定代受苦といふはこれ一 一四〇
 後には火焔さかり一 一四一
 火しやう三昧一 一四二
 魔界をしたかへむがため一 一四三
 師弟子は多生のちきり一 一四四
 ふはひ八旬一 一四五
 密宗と申はもろくの真言の功德一 一四六
 法興が在生のつみをしるせる簡一 一四七
 大聖文珠の化身一 一四八

まことにすくるとの給こと一 四三〇

一切の僧にをきて帰依をいたすべきもの一 四三〇

水つふふしにたちけること一 四三〇

わうまくりまゝにまゐること一 四三〇

信力のよはきがゆへ一 四三〇

二万の人ありしところ〇一 四三〇

2 連体形十なり

このめばおのつから發心すとは申たる一 三〇一

はやく道心をこのみてすみやかに名利をはなるべき一 三〇一

光明をはちておかみ給一 三〇一

三教指歸と申文にはかき給へる一 三〇一

二万人にかすそひてあるよしをいはひてよめる一 三〇一

後世の資糧をまうけ給べき一 三〇一

あるいは逆修の善をまうくべき一 三〇一

天然のならひ重職とする一 三〇一

一善なりといふ〇一はみ給べき一 三〇一

和哥をもちまたすてあはれぞ一 三〇一

かならずわい〇出家進すべき一 三〇一

とく三車にのり給べき一 三〇一

仙よにりて給たる時出家進しておこなふべき一 一八〇

淨土をもとめ給べき一 一八〇

されば出家したるものゝなをば怖魔とは申たる一 一八〇

第六天魔王の宮殿振動する一 一八〇

このゆへにま〇とすとは申一 一八〇

なかく魔王のぬひをはなる一 一八〇

出家の物一人あれば魔王振動する一 一八〇

仏道をのり給べしとは申侍一 一八〇

信をいにして淨土をもとめ給べき一 一八〇

無上菩提をのり給べき一 一八〇

なを仏道をならむと申べき一 一八〇

またくうしろめたきことはなき一 一八〇

尺尊の父を念したてまつるべき一 一八〇

仏道をばいのる〇ぞ一 一八〇

出離の期をしらざる一 一八〇

往生の心なきがゆへに惡道に口侍なり一 一八〇

生死の苦輪海をわたるべき一 一八〇

仏道をばいのるべき一 一八〇

少々申べき一 一八〇

往生極樂をおかひ給べき一 一八〇

金蓮台にのせ給 — 三〇七

来迎引摺をまち給べき — 三〇八

我は冷泉川原の辺に侍 — 三〇九

われをば一年に一度供養せらるゝ — 三一〇

やまをくりの地蔵とは申侍 — 三一一

淨刹におくられたてまつるべき — 三一二

仏の分に申侍 — 三一三

仏道をばねかひ給べき — 三一四

僧と申はもろくの声聞縁覺を申べき — 三一五

衣をそめたらんものを歸依すべき — 三一六

烏鴉とは黒からすを申 — 三一七

あさむがすして歸依をいたすべき — 三一八

くれなひのはかまをかけてたちたまへる□ — 三一九

2 助詞十なり

こゑをのみぞぎかましと — 三二〇

4 なり十助詞

一善 — といふ□いとなみ給べきなり 三二一

た、しはしのこと — とその給ける 三二二

榮勸をはしめておほくの仏 — との給ければ 三二三

保留孫仏をはしめておほくの仏 — との給けれ 三二四

道心なき衆生のことをかなしむ — とその給け 三二五

る 三二六

一日一夜 — とも 三二七

こひうけたてまつる — とその給ける 三二八

まして地獄の中 — とも 三二九

た、我を饗し給 — と見えたり 三三〇

「なる」の連体形

迦陵頻の東の中 — (準体法) 三三一

須弥山のやう — 堂に 三三二

重罪口物 — がゆへに 三三三

蘭菊紅葉のさ□り — いろ 三三四

た□のくに — ひと 三三五

京 — 仏師 三三六

越前国 — もの 三三七

五六すばかり — 地蔵 三三八

ねすみのあしあとの□う — もの 三三九

(なめり) をし — めりとて 三四〇

まことにさ — めりと 三四一

わが地蔵のし給へる — □りとて 三四二

地蔵のしたまへる — めりとて 三四三

真言の功徳は□たく侍ことーめり
私ーめりと信して
四九〇

「なれ」(已然形)

みな人のしりたまへることーば
五九四

かくまとへる所ーども
六〇〇

遠国ーば
七〇七

むかしものかたりーば
九〇二

悲業ーはこひうけたてまつるなり
三三〇

やすきほこのことにこそ侍ー(係結法)
三三〇

知興無心ーば
三五二

大食無智のものーども
四〇〇

なんどーしなど
七〇〇

おもはしきめかなしき子ーいてきて
七〇〇

ものーえてくはむとおもひて
三〇四

うれしーもあろかなり
三三〇

女房ーはえ心え給まじければ
三六二

あやしの山寺法師ーは
三六二

悪趣をまぬかるー申ためれば
五九〇

に

1体言ナに

第一道心をおこして
一〇二

無上の位ーのほらんこと
一〇四

道心の方ーよるべし
一〇五

千手陀羅尼經ー大悲心これといふは
一〇六

心のほかー別の法なし
一〇八

心ー心口ゆるすことなかれ
一〇一

猿猴ーにたり
一〇三

華嚴經の中ー(略)功徳をばほめ給て侍めり
一〇四

住木宝珠をかざりて木ーいれは
一〇二

水ーぬるることなし
一〇二

菩提心の玉をみーかけつれば
一〇三

生死の海ーしつむことなし
一〇三

一切の宝の中ーは金如意珠すくれたり
一〇四

一切の功徳の中ーは菩提心の功徳すくれたり
一〇五

一切鳥の中ーは迦陵頻の貝の中なるなをしすく
一〇六

れたり
一〇六

千年ころもーしむといふとも
一〇八

梅檀香の一日ーおよはざらんがごとく
一〇八

一切の功徳の中ー菩提心も又々かくのごとし
一〇八

出る菩提心経ーは(略)あよはじといへり
一〇三

十方世界の水を濺いで来て
 三六五
 堂へすへたてまつりたらん
 三六七
 菩提心をおこさむ功德の十六分一およはじとい
 三六八
 へり
 宝積経一は菩提心の功德(略)虚空にみちてぞあ
 三六九
 らましといひ
 三七〇
 虚空一みちてぞあまし
 三七一
 秘密藏経一は(略)とをしへ
 三七二
 出家功德経一は(略)無量の徳をうといへり
 三七三
 密ものは樂一ふけりて
 三七四
 飢その中一あり
 三七五
 録その中一あり
 三七六
 三教指帰と申文一はかき給へるなり
 三七七
 善一はものうく
 三七八
 悪一はすゝめることにて
 三七九
 菩提の善友一あるそかにして
 三八〇
 煩惱の悪縁一したしめる
 三八一
 ゆふへのかせとちり
 三八二
 あか月のくも一かくる
 三八三
 春のかせ一さそはれ
 三八四
 秋のしも一うつさる
 三八五
 暁のつゆ一にたり
 三八六

九泉のたひ一おもむかんとす
 四四七
 摩訶陀国のほか一王なし
 四四八
 微宗王のため一たひく
 四四九
 楚項羽一やかれ
 四五〇
 備中国下つ道の郡一の里あり
 四五一
 民部卿保則の任一この郷の人をしるすに
 四五二
 あはせて九人一なれり
 四五三
 清行卿の意見一あり
 四五四
 主基の方の哥一よめるは
 四五五
 二万人一かすそひてあるよしを
 四五六
 毎年一二十艘の貢口すべよし
 四五七
 鎮西一して崩給ぬ
 四五八
 大嘗会の口ひ一言志舞をおほせらる
 四五九
 百日ばかりがうち一一日に三人などうせ給にけ
 四六〇
 り
 四六一
 一日一三人などうせ給にけり
 四六二
 人一もしられぬは
 四六三
 一度一うせ給へることなし
 四六四
 文彦と申ふみ一は(略)とは申たるぞかし
 四六五
 世中をよそ一おもへるは
 四六六
 女の中一あらましかばと
 四六七
 女の中一あらましかばと
 四六八
 女の中一あらましかばと
 四六九
 女の中一あらましかばと
 四七〇

けふまではおそーのみきくはみなさの

二〇二

いつみのうへーならんとすらん

二〇一

六七月ばかりーうせさせ給にき

二〇〇

一庫ーかくはかなくならせ給ことも

一九九

まやぶ人のうつり給しゆひへーかは口ことなく

非情

一九八

くろからすーなり侍にき

一九七

あらぬことーなりて

一九六

御いみはつるまーまいりて

一九五

いつかはそてーつゆはこほれし

一九四

異途のたひーはひかりもなく

一九三

つゆの口のちのぎえぬさぎー

一九二

七分がーぞあたると申て侍める

一九一

瑠宮ー池あり

一九〇

玉のかつらーさすをもて

一八九

この池ー鴛鴦花をもてあそひて

一八八

まことのをしのごゑーかはることなし

一八七

ぬすむほとーまもる人見つけてとらへつ

一八六

死てのうーをさへは

一八五

とらへられぬさぎーを口のまゝをせんがごとく

一八四

仏法ー歸し給ひき

二〇四

七宝ーともしく

二〇三

万物ーがすかにして

二〇二

十善の位ーありし時は

二〇一

万機の政ーおそれあるがゆへに

二〇〇

ついに仏法ー歸しき

一九九

吾輩ーは出家遁世する人(略)おほくきこゑ侍め

一九八

所々ー修行し給口

一九七

いつみの国ーひねと口ふ所にて

一九六

一人法師ーなりて

一九五

御共ー候けるに

一九四

那智のやまーこもり給

一九三

りそのほとりーあふきふして

一九二

龍顔ーちかつぎ

一九一

前後ーしたかひしこと

一九〇

ひえのやまのふもとー小野とりふ所に

一八九

小野とりふ所ー法師になりて

一八八

法師ーなりてこもり給へりけるに

一八七

多武峯ーこもり給

一八六

法師ーなり給けるころ

一八五

女の中ーうらやましくもすめる月かな

一八四

* 一八三

参川入道寂然一いたるまで

四〇三

みーやまひあり

四〇四

延暦寺の房一まかりて

四〇五

東一は未子なり

四〇六

後一は陽明院と申

四〇七

後一は土御門右大臣と申北方にて

四〇八

父の御とも一君彦あまた中堂へまがり給て

四〇九

いま一度一との給けるにあはせて

四一〇

この山にてぞ法師一はなり給にける

四一一

大原一こもり

四一二

霊山一ゐられて待めれ

四一三

おこなひのひま一は和哥をもりまたすてあはれ

四一四

ざなり

四一五

せう／＼の公達一もおとらず

四一六

霊山一こもりゐて

四一七

ひえのやま一してかくぞよみ侍ける

四一八

なくね一あかでとしはへにける

四一九

大原一こもりゐて

四二〇

ちりつもあるみちをかきてよそ一みば

四二一

女の中一もきこえ侍めり

四二二

すくすほと一よきつかさなり

四二三

みをすつることはあらんとおもふほど一口の願

四二四

をとけず

四二五

ゆめ一りのちなかゝるべしと見て

四二六

ひさしくよ一あらんずれば

四二七

ものさほかしとおもふほと一

四二八

実夢一あらざりければ

四二九

よき相人一みえて

四三〇

後世の資料とせんとおもふほど一

四三一

とく三車一のり給べきなり

四三二

仏祇沓精舎一おはしまし、時

四三三

仏よ一いて給たる時

四三四

七宝一ともしからず

四三五

仏又よ一りて給ことあらば

四三六

そのとき一出家しておこなふべし

四三七

たま／＼一仏去一あひたて

四三八

波羅門一さけ一ゑひて

四三九

をはり一仏をみたてまつることありき

四四〇

たわふれ一あまのけさをきたりし

四四一

すへ一のりをきくことをえたりき

四四二

魔王一もなかく奴婢をうしなふゆへに

四四三

こまかには出家功德経一いへり

四四四

罪一よりて

四四五

地獄一をつ

四四六

浄土一往生せむこと

第二一深三宝を信じたてまつりて

仏なるべしと

僧の力一よるがゆへに

僧の力一あ□や

涅槃経一も申たれば

舎利弗一は諸悪一とめりし

仏道一いれて

法華経一も給はこれなり

子をもておもて一□て

いはんや冥途の苦患一をいてをや

冥より一いりて

乃往過去一大王をはしき

これ□て一とり

み一ふるもの

長大の時一いたるまで

かはねをつかのうち一うつむ

塚のほとり一のそみて

死骸をみ一ふるゝに

摩訶波羅門一のやうなとりたまひしより

一代教主一おもひをかけて

もし仏よ一いてたまはざりせば

三〇四

三〇五

三〇六

三〇七

三〇八

三〇九

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

三一〇

人一むまるゝ人もなく

天一うまるゝものもなくして

あくたう一をちて

大般若経一ぞ申ためる

悪道一□侍なり

天竺の祇園寺一は

天台座一は(鷲)匠玉の尊密を本尊とす

聖もこれ一帰す

仲胤が説法の口一しるせり

極樂一は弥陀左脇の弟三

悲愍一は施無畏の菩薩なり

身を三十三一変して

形を六種一現して

身は羅刹世のふところ一いれども

心一念すれば

命は梅陀羅が鋒一のそめども

大悲苦一かはり給

中一もたのもしくかなしき文ども侍

ゆめ一この文一うたかひをなすことなく

浄土一むまるといふは

金蓮台一のせ給なり

極樂一往生する人

三〇四

三〇五

三〇六

三〇七

三〇八

三〇九

三一〇

三〇四

三〇五

三〇六

三〇七

三〇八

三〇九

三〇四

三〇五

三〇六

三〇七

三〇八

三〇九

三〇四

三〇五

三〇六

天竺の毗沙離國ヒサリクニは(略)鳥麩トリコをかくし 三〇七
去滅キョウメツのしるし鳥麩トリコをかくし 三〇八

四天王寺シテウオウジは(略)救世クウセイのすかたをあらアらラ口クし給 三〇九

仏法ブツポフのはしめシメ一救世クウセイのすかたをあらアらラ口クし給 三〇九

南遊ナンユウのほとりトは(略)千和チワ口クなり 三〇一

北嶺ホクリョウのふもとトは(略)觀音クワンオンの垂蹟シュイセツにあア口ク 三〇二

仙師センシははりて射イられ給キひ 三〇三

猪イノシシなりて 三〇四

行者ゲウジャははりて 三〇四

女メははりて 三〇五

ぬしヌシおとこあはせ給 三〇五

童ドウあらはれて 三〇六

仙師センシははりて 三〇六

仙師センシ觀音クワンオンをつくらせて 三〇七

うまウマはりて口クたる馬ウマを 三〇八

よるこひてのりてゆくほとト馬ウマぬしおもひみる 三〇九

に 三〇九

やまヤマゆきあひて 三〇九

家イヘははりて 三〇九

この觀音クワンオンははりてたてまつれることなり 三〇九

猪イノシシなりて 三〇八
行者ゲウジャははりて給といふは 三〇八
大野オホノふりこめられて 三〇九

ぬのしヌなりて 三〇九

女メなりて 三〇九

よるこひていぬとおもふほとト 三〇九

觀音クワンオンのかたトは(略)たちたまへヘ口クり 三〇九

紀伊國キイクニははりていしなるものあり 三〇九

上ウヘ衣エきたるわらははりて 三〇九

利リ生シめのまへヘあらはれ 三〇九

各オノオノ驛イキ記キみえたり 三〇九

劫クワク菴サウ樹ジュのほとりして 三〇九

諸オノオノ仙セン菩薩ボサツあつまり給へりし中ナカ地チ藏ザウ菩薩ボサツ口クよひ 三〇九

ははり給て 三〇九

女メははりて 三〇九

身を二十五ニジュゴちらして 三〇九

菩薩ボサツ苦クははりて地チ獄ゲクにおち給 三〇九

菩薩ボサツ苦クにかはりて地チ獄ゲクにおち給 三〇九

氷ヒメのしたシタは億オウ千セン歳サイ慈ジ悲ヒのきもをくたし 三〇九

ほのぞの中ナカは無ム量リヤウ劫クワク忍ニン辱ジュクのはたへをこかし給 三〇九

毎日オノオノ晨朝シンサウことトかならず地チ獄ゲクのとほそにのみ 三〇九

て
三三〇

地獄のほそーのそみて
三三〇

西坂本ー親音院□あり
三三〇

その□とリーすみける老たる女
三三〇

おこけといふものーいれて
三三〇

かならずまいらせけるほとーやうくとしつも
三三〇

りにけ□
三三〇

よのほとーうえられにけるかな
三三〇

あまりのあざましざーこまかに見ければ
三三〇

田の中ーねすみのあしあとの□うなるものぞ見
三三〇

え侍ける
三三〇

御あしーとろうちつきてぞおはしましける
三三〇

二糸つゝみー色紙すきあり
三三〇

講衆ーいりぬ
三三〇

焰魔王ーこひう□て
三三〇

あまりのうれしざー(略)とゝひければ
三三〇

冷泉川原の辺ー侍なり
三三〇

そーも(略)供養せらるゝなり
三三〇

一年ー一度供養せらるゝなり
三三〇

そのうれしざー(略)こひうけたてまつるなり
三三〇

東山ーまつしぎせありけり
三三〇

ちかぎほとー(略)つねにまいるける
三三〇

□まゆふくれー僧一人きたりて
三三〇

いみあきけるまゝーまいりて見ければ
三三〇

御あしーつちうちつきてぞ□しましける
三三〇

地蔵の験記ーぞ申ためる
三三〇

よのすへーそらかく侍めれば
三三〇

左手ーはさくをにきる
三三〇

右のたふざーは劍をもてり
三三〇

後上は火焔さかりなり
三三〇

前ーは降伏のすかたをあらはす
三三〇

はやく明玉ーおもひをかけて
三三〇

淨刹ーおくられたてまつるべきなり
三三〇

せなかりをひて
三三〇

都宰の内院ーたり
三三〇

船ーあらはれて
三三〇

御弟子の中ー(略)師にかはらむと申人あらは
三三〇

師ーかはらむと申人あらは
三三〇

病のせむるまゝーめを見まわしてみるに
三三〇

このたひ師ーかはりて
三三〇

後庄ー三宝のあはれみをもかふらむと
三三〇

我師ーかはりたてまつらん
三三〇

眼^メにみたをうかへて
 老^{ロウ}御^ゴ堂^{ドウ}あり
 すでに師^シかはる
 絵^エ像^{ゾウ}不^フ動^{ドウ}等^{トウ}むかひて
 今^{イマ}生^{セイ}のいのちをば師^シかはる
 北^{キタ}は師^シかはる
 われは行者^{ヤクシャ}かはらむと
 大^{ダイ}聖^{セイ}明^{メイ}王^{オウ}おもひをかけて
 僧^{ソウ}の分^{ブン}申^{マシ}べし
 仏^{ブツ}の分^{ブン}申^{マシ}なり
 河^カ内^{ナイ}国^{クニ}侍^シける聖^{セイ}人の
 はしめて来^キのほりて
 御^ゴ堂^{ドウ}まはりて見^ミければ
 御^ゴ願^{ガン}身^{シン}人はらはせて
 仏^{ブツ}よく仏^{ブツ}おもひをかけたり
 諸^{シュ}仙^{セン}おもひをかけて
 法^{ホウ}を信^{シン}じて仏^{ブツ}なるべし
 おほやうは法^{ホウ}花^カ経^{キョウ}きはめたり
 別^{ワケ}申^{マシ}へきがゆへに
 たやすく申^{マシ}のへかたさかうへ
 ひこのものかたり申^{マシ}しことをも
 地^チ獄^{ゴク}をちぬ

三三〇一
 三三〇二
 三三〇三
 三三〇四
 三三〇五
 三三〇六
 三三〇七
 三三〇八
 三三〇九
 三三一〇
 三三一〇

としふりひつもるほと
 をのつから風^{カゼ}ふかれて
 聖^{セイ}縛^{バク}が廟^{ミヤ}かよりぬ
 一^{イチ}切^キ経^{キョウ}を百^{ヒャク}万^{マン}返^{エン}よむ功^ク徳^{トク}ひとし
 高^{タカ}きみねのほりて見るに
 めいかゝるほと衆生
 こくらく往生
 三^{サン}聖^{セイ}道^{ドウ}おつといは
 尊^{ソン}勝^{ショウ}陀^ダ羅^ラ尼^ニの功^ク徳^{トク}よりて
 極^{キョク}樂^{ラク}往生^{シヨウジヨウ}
 現^{ゲン}世^セもめてたくぞ侍^シめる
 百^{ヒャク}鬼^キ夜^ヤ行^{キョウ}あひて
 こそでの尊勝陀羅尼をぬひく、みたりけ
 るにぞ
 振^シ旦^{タン}国^{クニ}廣^{コウ}洲^{シュウ}の法^{ホウ}與^ヨといふものあり
 琰^{エン}魔^マ王^{オウ}宮^{キョウ}めされぬ
 大^{ダイ}なる車^{クルマ}鉄^{テツ}の筒^{ツツ}をつみて
 冥^{メイ}官^{カン}の前^{マエ}ひきいたせり
 ふたのはし聰聞といふ文字あり
 このよはありかたくぞ侍^シ
 野^ノ中^{チュウ}ふせる乞食の沙^{シャ}門^{モン}
 海^{カイ}渚^{シュ}とりあり

三三〇四
 三三〇五
 三三〇六
 三三〇七
 三三〇八
 三三〇九
 三三一〇
 三三一〇
 三三一〇
 三三一〇
 三三一〇

十輪^{じゆんりん}経^{きやう}一^{いち}はく
 行^{ぎやう}基^き善^{ぜん}薩^{さつ}の碑^ひ文^{ぶん}一^{いち}は(略)とはかき給^{たま}ぞかし 四三〇
 野^の間^ま河^か辺^べ一^{いち}あそひ給^{たま}に 四三〇
 白^{はく}鶴^{かく}のおむ一^{いち}ほうせんとし給^{たま}に 四三〇
 その犬^{いぬ}の夢^{ゆめ}一^{いち}(略)と見えたり 四三〇
 備^ひ一^{いち}供^{くわん}養^{やう}をのふる 四三〇
 舍^{しゃ}利^り一^{いち}つけての給^{たま}はく 四三〇
 供^{くわん}養^{やう}一^{いち}ともし 四三〇
 一^{いち}切^{せつ}の僧^{そう}一^{いち}をきて 四三〇
 太^{たい}多^た一^{いち}つたへて 四三〇
 犬^{いぬ}のかたち一^{いち}むまれき 四三〇
 兼^{かね}武^ぶの佐^さ家^け一^{いち}のりし 四三〇
 往^{わう}生^{じやう}極^{ごく}樂^{らく}の、そみ一^{いち}をきて 四三〇
 はちすのうへ一^{いち}のほらぬはなし 四三〇
 極^{ごく}樂^{らく}一^{いち}むまれずといふことあるべからず 四三〇
 天^{てん}竺^{ぢく}一^{いち}愚^ぐ直^{ぢく}といふものありき 四三〇
 人^{ひと}一^{いち}とひければ 四三〇
 つふふし一^{いち}ぞたつといひければ 四三〇
 つふふし一^{いち}たちけることなり 四三〇
 唐^{たう}土^ど一^{いち}僧^{そう}強^{きやう}といふものありき 四三〇
 盲^{もう}目^{もく}一^{いち}なりにけり 四三〇
 後^ご世^せ門^{もん}一^{いち}回^{かい}りて 四三〇

山^{さん}寺^じ一^{いち}ゆきて 四三〇
 現^{げん}身^{しん}一^{いち}まなこひらけて 四三〇
 後^ご世^せ一^{いち}わう生^{じやう}のさうをあらはすことなり 四三〇
 2連用形十に
 新^{しん}羅^ら國^{こく}せめ一^{いち}むかひ給^{たま}ける時^{とき} 五三〇
 父^{ちち}のごとく一^{いち}たのみたてまつりて 二〇一
 いふがごとく一^{いち}まつりかえつ 三三〇
 3連体形十に
 百^{ひやく}千^{せん}の塔^{たつ}をつくる一^{いち}すくれたり 三〇三
 申^{まう}一^{いち}およひ侍^じらねども 五〇四
 兵^{へい}をめす一^{いち}二万人たてまつれり 五〇七
 この郷^{ごう}の人をしるす一^{いち}(略)九人になれり 六〇二
 の口^{くち}りたりける口^{くち}善^{ぜん}宰^{さい}相^{さう}清^{せい}行^{ぎやう}卿^{きやう}のとひ給^{たま}ければ 六〇四
 とけおしてすきゆく一^{いち}(略)せめ給^{たま}けり 六〇七
 かそへ申^{まう}一^{いち}およひ侍^じす 七〇六
 何^{なに}遲^ぢ一^{いち}ほこりて 八〇五
 こまかに申^{まう}一^{いち}およひ侍^じす 九〇二
 をしのなくまねをする一^{いち}まことのをしの二系に 二〇一
 かはることなし 二〇一
 をしのなくまねをせん一^{いち}をしなめりとてあやし 二〇四
 むべからず 二〇四

御共ごともに候まをける一ひと哥うたよめとおほせことありければ

二二五

こもり給たまへりける一ひと(略)見給みたまければ

二二六

まいり給たまて侍まへける一ひとせうざもせでねいり給たまて侍まへ

二二七

一ひと度たびにどの給たまける一ひとあはせて

二二八

大地おほ獄ごくへつかはしける一ひと(略)と申まをければ

二二九

みにふる、一ひと病やまをいやすこと存ぞん庄じやうのごとし

二三〇

むかへまいらせたりける一ひとたうとさ

二三一

馬うまぬしおもひみる一ひとかりければ

二三二

親おや音ねをつくりたてまつり侍まへける一ひとち、は、みな

二三三

うせてのち

二三四

女むすめ子の一人のこりみたりける一ひと(略)よきおとこ

二三五

あはせて

二三六

いひけるを口くちくにあさましくて

二三七

地ち蔵ざう講かうを行なける一ひとと心こころざしはなけれども

二三八

は、をもちたりける一ひとをくれにけり

二三九

災わざ天てん一ひと病やま患わづらひをうけて

二四〇

トは眩くらせさする一ひと定ちやう業ぎやうかきりあり

二四一

めを見まわしてみる一ひと人もかはらむといふも

二四二

のなし

二四三

これを見る一ひとかなしくおほえければ

二四四

したてたる一ひと皆みな金かね色いろの御ご仙せんの(略)おはしましける御ごまへを

二四五

申まをひらく一ひとをよひ侍まへらむ

二四六

高たかきみねにのほりて見る一ひと(略)悪あく趣すゑをまぬかる

二四七

なんど申まをためれば

二四八

名なをきく一ひとたのみあり

二四九

うけ給たまける一ひと返かへ々々たのもしくぞ侍まへ

二五〇

百ひゃく息いき夜や行ぎやうにあひ給たまへりける一ひとも(略)たすかり給たまへりける

二五一

ぬひく、みたりける一ひとたすかり給たまへりける

二五二

あさやかなる一ひとはすくれたるがごとく

二五三

あそひ給たま一ひと壽じゆ由ゆ國こく玉ぎよをさしたてまつらんとする

二五四

を

二五五

おむにほうせんとし給たま一ひと白はく鷗しゆのなかりければ

二五六

4 ために

ほのを、ふせがんがため一ひと子こをもておもてに口

二五七

て

二五八

ほめられんがため一ひとみつから子こを口くちろすなど

二五九

下げ劣れつのともからのため一ひとかむさしをたまひ

二六〇

死のためをかされて
三三六

道如がためには華嚴經の偈をとき
三三五

王氏がためには法花經の咒をよみて
三三四

怨敵をふせかんがためにかうまの相を現し給
三三三

らゆゑに

口別なきがゆへに心はこれ第一のあたなり
三三二

このゆへに善財童子の菩提心おこし給しをば
三三一

このゆへに二万郷となづく
三三〇

そのゆへに安倍氏の長者をゆめて
三二九

それゆへに道心おこしたりと
三二八

おそれあるがゆへに樂にすべからず
三二七

死するゆへに本意をとくるものなし
三二六

このゆへにま□とすと申なり
三二五

奴婢をうしなふゆへに(略)魔王振動するなり
三二四

重罪□物よきかゆへに(略)獄へつかはしけるに
三二三

仏法僧の力によるがゆへに道をえ給へり
三二二

このゆへに三宝を信して
三二一

このゆへに(略)きさきを見たてまつらんことを
三二〇

ねかふ
三三六

やまひをもちゆへに出辭の期をしらざるなり
三三五

死苦にせめらる□がゆへに闕□正念ならず
三三四

臨終正念ならざるがゆへに往生の心なし
三三三

往生の心なきがゆへに惡道に口侍
三三二

別に申べきがゆへにまつ密宗のかたをあるく
三三一

申侍べし
三三〇

宗のをもちがゆへにたやすくのへがたきがうへ
三二九

に
三二八

罪業をもちがゆへに命終の時地獄に落ちぬまう
三二七

此功德のゆへに地獄のかなへわかれて
三二六

あめをそくがゆへに(略)あなつるべからず
三二五

人帰依せざ□へに供養にともし
三二四

このゆへに破戒の僧を□する功德は
三二三

このゆへに一切の僧にをきて帰依せりたすべき
三二二

ものなり
三二一

ひねといふ所(略)た一人法師になりて
三二〇

千里の乘といふ所(略)御心ちわつらぬて
三一九

晴	つゆ	四〇五
小	ひい	四〇六
三	途	四〇七
九	泉	四〇八
天	下	四〇九
仏	法	四一〇
吾	朝	五〇一
毗	沙	五〇二
給	狐	五〇三
摩	訶	五〇四
徹	宋	五〇五
茫	廢	五〇六
一	一	五〇七
備	中	五〇八
一	一	五〇九
在	国	五一〇
二	万	五一〇
民	部	五一〇
二	の	六一二
人	一	六一三
人	一	六一四
清	行	六一五
後	冷	六一六

後	冷	院	御	時	の	大	會	會	の	主	基	の	方	の	哥	六〇七																																																																																						
後	冷	院	御	時	の	大	會	會	の	主	基	の	方	の	哥	六〇八																																																																																						
後	冷	院	御	時	の	大	會	會	の	主	基	の	方	の	哥	六〇九																																																																																						
後	冷	院	御	時	の	大	會	會	の	主	基	の	方	の	哥	六一〇																																																																																						
二	万	一	人	二	十	綱	一	貢	調	二	万	一	人	二	十	綱	一	貢	調	六〇三																																																																																		
代	々	一	み	か	と	安	倍	氏	一	長	者	大	會	會	一	口	ひ	に	一	ま	一	広	田	明	神	長	德	元	年	一	こ	と	日	記	家	一	人	々	生	死	一	無	常	み	一	う	へ	一	天	下	一	國	田	一	京	一	人	法	住	寺	一	七	条	殿	の	あ	り	さ	ま	法	住	寺	の	七	条	殿	一	あ	り	さ	ま	南	殿	一	み	す	す	ぎ	ぬ	る	春	一	御	賀	の	ま	ひ	御	賀	一	ま	ひ

つかひをえてきたる人ーごとし

三〇四

父ーごくと

三〇五

人薬王子ーごとし

三〇六

かくーごごとくして

三〇七

存生ーごとし

三〇八

三四三

またーかくーごとし

三〇九

2 形容詞連体形十の

おほくー諭

三一一

おほくーつかさ

三一二

おほくー仏

三一三

おほくー仏

三一四

3 副詞十の

あまりーあさましさ

三一五

あまりーうれしさ

三一六

4 助詞十の

四位五位などー人

三一七

仏ばかりー人

三一八

正主格

善鬼業王ー一切のやまひを滅するがごとく

三一九

善財童子ー菩提心おこし給しをば

三二〇

童子ー貴にはあらず

三二一

菩提心ーたふとまゆへはり

みな人ーしりたまへることばれば

皇極天皇ー新羅國せめにむかひ給ける時

公堂といふ國司ー神拝しての口りたりけるに

善宰相清行卿ーとひ給ければ

天下ーおとろへゆくありさま

人のがすーうすること

神功皇后ー新羅國をうちとり給て

天智天皇ー春宮にておはしますを

神功皇后ーせめ給し時

人ーわろくてしぬるぞ

はかなさーいつみのうへにならんとすらん

まやふ人ーうつり給しゆふへ

つゆのりのちーきえぬさきに

月ーあか、りけるよ

御家ー繁昌し給へること

大聖ー、給やう

地蔵菩薩ー地獄ー衆生をみちひき給

父ーろをおもふがごとく

阿闍世王ー父をころいしをも

阿育王ー八万四千の后をころいしをも

阿育王ー八万四千の后をころいしをも

御弟ともあやしみてとひたてまつりければ

三〇二

善明天子一紙迦の恩徳をほめよろこびて

三〇三

あなうの観音一仏師にかりていられ給

三〇四

なりあひの観音一猪になりて

三〇五

行者一くふべき物なくして

三〇六

かねかさきの観音一せになりて

三〇七

越前国なるの観音をつくりたてまつり侍けるに

三〇八

女一一人のこりみたりけるに

三〇九

こかはの観音一人りのり給

三一〇

子なりけるおとこ一つくりてとらせけるが

三一〇

おほちすくるもの一(略)といひけるを

三一〇

た一よのほとにうえられにけるかな

三一〇

わが地蔵一し給へるな口り

いかなる人一かくはし給ぞ

三一〇

かゝること一ある

三一〇

地蔵一したまへるはめり

三一〇

病一せむるまゝに

三一〇

宇治野原一関白左大臣にて

三一〇

御仙一まなしりをならへておはしましける御ま

三二〇

入を

宋一をもぎがゆへに

三二〇

持者一高みおねにのほりて見るに

三二〇

めのと一(略)ぬひく、みたりけるにぞ

三二〇

口をまくもの一寒趣をまぬかるゝこと

三二〇

白鷗一なかりければ

三二〇

舍利弗尊者一僧に供養をのふる

三二〇

影賢王一十僧を供養せし

三二〇

阿育王一諸僧を拜せし

三二〇

維那一おろかにして外僧をあなつりし

三二〇

黄帝一天老をとひし

三二〇

漢武一匈奴にいのりし

三二〇

なもあみたふつといふ人一はちすのうへのほ

三二〇

らぬはなし

三二〇

少沙弥一ありけるが

三二〇

信力一よはきがゆへなり

三二〇

魚の子一かへることすくなく

三二〇

奄羅菓一生することかたきがごとく

三二〇

三 同格

河内国に侍ける聖人一一度も京も見ざりけるが

三二〇

のみ

余の花ーあそやかなるにはすくられたるがごとく

三〇

名をーぎく

磯ーのこれり

はしりざわく人ーぞあほく侍ける

けふまてはよそにーぎく

一切の衆生はくをーうけて

くをーうけて

こゑをーぞぎかましとなり

三〇一

は

は

1 体言・副詞十は

大海ー消露よりおこり

須弥ー微塵よりはしまる

万法ー心の所口して

心ーこれ第一のあたなり

心ー野馬のごとし

たましひー猿猴ににたり

煩惱ー家のいぬ

菩提ー山のかせき

一〇三
一〇四
一〇五
一〇六
一〇七
一〇八
一〇九
一〇一〇
一〇一一
一〇一二
一〇一三
一〇一四
一〇一五

ネ観律師ー(略)このめばあのつから発心すとば

一〇一八

申たるなり

牛馬羊の乳ーきえうせぬ

菩提心の功德ーはかりかたし

在家ー無量の功德をう

宮ものー衆にふけりて

まふしきものー世路をわしりて

弘法大師ー(略)と三教指帰と申文にはかき給へ

るなり

田を作をりー飢その中にあり

物をならふ時ー鋤その中にあり

むかし見し人ーみな三途の故郷へかへり

(いま)まぎくものー又九泉のたひにおもむかんとす

大林精舎ー名左のみきく

祇洹精舎ー礎のみのこれり

白鷺池ー水たえて

菩提樹ー砌をはなれて

震旦国ー(略)徽宗王のためにたひく仏法ほろ

ほされて

五泉寺ー住僧みな逃散し

五〇一
五〇二
五〇三
五〇四
五〇五
五〇六
五〇七
五〇八
五〇九
五〇一〇
五〇一一
五〇一二
五〇一三
五〇一四
五〇一五

怖魔といふこと一まを、とすと申ことなり
 五〇一 出家せざるほと一魔王の奴婢なり
 五〇二 出家しつるのち一仏の御子となりて
 五〇三 七度出家したる功德一あるべからずや
 五〇四 諸仏一みな仏法僧の力によるがゆへに
 五〇五 弥陀一聖王仏を拜して
 五〇六 釈迦一赤花経をつとめて
 五〇七 阿耨菩提一信心を因とす
 五〇八 教主紙尊一一切の衆生をあはれみて
 五〇九 人間のをや一子をおもふ心さしふかしといへど
 五一〇 も
 五一一 大聖世尊のをや一またくうしろめたきことばな
 五一二 きなり
 五一三 うしろめたきこと一なきなり
 五一四 王子一誕生の、ち一王子を見たてまつり
 五一五 梅檀の煙とのほり給てのち一遺教をと、め
 五一六 この文の心一(略)二心をのみぞきかましとなり
 五一七 一切の衆生一くをのみうけて
 五一八 薬師如来一医王の薬をさつけて
 五一九 薬童子一見るものやまひをうしなひ
 五二〇 阿伽陀薬一なむるもの苦をまぬかる
 五二一

延暦寺一丸桑右丞相の建立なり
 五二二 大聖觀世音菩薩一極樂には弥陀左脇の弟子
 五二三 身一羅刹世のふところにいれども
 五二四 命一梅陀羅が鉢にのそめども
 五二五 あの中の觀音一仏師にかはりて射られ給ひ
 五二六 なりあひの觀音一猪になりて
 五二七 かねかさの觀音一せに變して
 五二八 こかはの觀音一童にあらはれて
 五二九 とりたりとおもふ馬一なくて
 五三〇 地藏菩薩一我等衆生がみかくたのみたてまつる
 五三一 べき菩薩なり
 五三二 としころ一子なりけるおとこのつくりてとらせ
 五三三 けるが
 五三四 この口一つくりてくれ給てまし
 五三五 いと心さし一なけれども
 五三六 いかなる人のかくし給ぞ
 五三七 我一冷泉川原の辺に侍なり
 五三八 かにことをかく一なけき給ぞ
 五三九 大聖不動明王一(略)かうまう賜と現し給
 五四〇 師弟子一多生のちきりなり
 五四一 このみ一ゆめまほろしのごとし
 五四二 女一師にかはる
 五四三

菩提心といふ一大悲心なり

一〇六

大悲心これといふ一すなわちこれなり

一〇七

主基の方の哥によめる一かくまとへる所なれど

一〇八

人にもしられぬ一かそへ申にあよひ侍す

一〇九

よそにおもへる一待ぬものを

一一〇

なま一おほくもなりにけるかな

一一一

ある一なく

一一二

なま一かすそふよの中に

一一三

善を修する一とらへられて後

一一四

ゆめと見えつる一うらみやすらんまたと、はね

一一五

男六人と申一太郎にては 関白左大臣 頼一なり

一一六

一品宮と申一後には 陽明門院と申

一一七

仏になるべしと申一三世の諸仏はみな仏去僧の

一一八

かによるかゆへに

一一九

去花経にも 給一これなり

一二〇

人業王と といふ一(略) 大王をはしき

一二一

の 給ける一(略) とはの 給ぞかし

一二二

浄土に ちまるといふ一すなはち

一二三

たれが 観音の 来迎を はれたる一ある

一二四

かはりていられ給といふ一(略) やをいたてたて
まつれることなり

一二五

くはれ給といふ一(略) わきのしたのしゝを

一二六

とりてくひていのちをいきたり

あとこあはせ給といふ一(略) 観音をつくりたて
まつり侍けるに

一二七

りのり給といふ一(略) いのりやめ給ことなり

一二八

決定代受苦といふ一これなり

一二九

仏になるべしと申一(略) みな成仏の因縁をとけ

一三〇

密宗と申一もろくの真言の功徳なり

一三一

僧と申一もろくの声聞縁覚を申やきなり 四空

一三二

鳥鵲養すべしといふ一昔天竺の國王野間河辺に

一三三

はちすのうへにのほらぬ一なし

一三四

おときみこそ一 民部卿長家とておはすめれ 四空

一三五

ふるき大臣大納言にてこそ一おはせましか 四空

一三六

あときみこそ一 わろしと申し 定

一三七

わすれて一 ゆめかどぞおもふ

一三八

太郎にて一関白左大臣頼朝なり 四〇三
 二郎にて一内大臣左大将教成なり 四〇四
 これを下す一りかてかよをすつることはあらん 四〇五

【では】

いかでかたざりたてまつらで侍らん 四〇六
 【とは】

あのつから発心すと一申たるなり 四〇七
 そのかはの水と一しるとも 四〇八
 速なることをうらむると一申たるぞかし 四〇九

ゆきふみわけてさみをみむと一 四一〇
 怖魔と一申たるなり 四一一
 比丘と一梵語なり 四一二

このゆへにま□とすと一申なり 四一三
 仙道をりのり給へしと一申侍なり 四一四
 の給けるは(略)と一の給ぞかし 四一五

やまをくりの地蔵と一申侍なり 四一六
 かはれと一いはねども 四一七
 僧を施すべしと一かき給ぞかし 四一八

【では】

国凶あらはると一の国の大蛇振動するがごとく 四一九
 四二〇

【なんどは】

世房なんど一え心え給まじければ 四二一
 あやしの山寺法師なんど一申伏らくにをよひ侍らば 四二二

【には】

宝の中に一金如意珠すくれたり 四二三
 功德の中に一菩提心の功德すくれたり 四二四
 鳥の中に一迦陵頻の貝の中なるなをすくれたり 四二五

出住菩提心経に一(略)といへり 四二六
 宝積経に一(略)といひ 四二七
 秘密藏経に一(略)とをしへ 四二八

出家功德経に一(略)といへり 四二九
 三教指帰と申文に一かき給へるなり 四三〇
 たれも善に一ものうく 四三一
 悪に一すゝめることにてぞ侍める 四三二

文選と申ふみに一(略)とは申たるぞかし 四三三
 冥途のたひに一ひかりもなく 四三四
 吾朝に一出家進世する人(略)おほくきこゑ侍めり 四三五

庚に一末多なり 四三六
 後に一陽明門院と申 四三七

四三八
 四三九
 四四〇

四四一
 四四二
 四四三

四四四
 四四五
 四四六

四四七
 四四八
 四四九

四五〇
 四五〇
 四五〇

後に土御門右大臣と申北方にて□めれ三三を
法師にーなり給にける 五五

ひまにー和哥をもちまたすてあはれざなり 五五

天竺の祇園寺にー(略)療病院をつくりて 五五

天台山にー伝教大師延暦寺をたて、 五五

極楽にー弥勒左脇の弟 五五

婆塞にー施無畏の菩薩 五五

天竺の毗沙離國にー(略)鳥琴をかしくし 五五

吾朝の四天王寺にー(略)救世のすがたをあら 五五

し給 五五

南嶺のほとりにー(略)千手□なり 五五

北嶺のふもとにー(略)観音の垂跡にあ□ 五五

米のじたにー億千歳慈悲のさもをくたし 五五

ほのぞの中にー無量劫忍辱のはたへをこかし給 五五

多聞がためにー華嚴經の働をとま 五五

王氏がためにー去花経の咒をよみて 五五

左手にーさくをにさる 五五

右のたふさにー劍をもてり 五五

後にー火焔さかりなり 五五

前にー降伏のすかたをあらはす 五五

このよにーありかたぐぞ侍 五五

余の心のあさやかなるにーすくれたるがごとく 四六

行基菩薩の碑文にー(略)とはかき給ぞかし四六

「まては」

けふまでーよそにのみまきく 六六

これまでーむかしものかたりなれば 六六

「まは」

菩提心の功德をーほめ給て侍めり 五七

菩提心おこし給しをー(略)おかみ給なり 五七

中有のやみをー□らさざりき 五七

なをー怖魔とは申たるなり 五七

善の衆生をー羅睺羅のやうにおほし 五七

悪の衆生をー善屋比丘のやうに見給 五七

仏道をーのる□まなり 五七

仏道をーのるべきなり 五七

駁をーとりてかへりぬ 五七

衆生をー汝にふそくす 五七

われをー一年に一度供養せらるゝなり 五七

この地藏をーやまをくりの地藏とは申侍なり 五七

のちをーかろくし 五七

ならふ所の総論をーおもくして 五七

今生の口のちを師にかはる

三五五

仏道を一ねかひ給べきなり

三五七

意の子を一おさなしとてかるむべからず

三五九

僧口一ちぬさし

三六一

は(終助詞)

いひてなかめし人もいつら

三六〇

ば

1 未然形十ば

水にけれ一人木にぬるることなし

三六二

まもる人あやしま一ましのまねをせんに

三六三

けふりとのほりな一あまのもしをひたくかどや

三六四

見む

三六五

はなさきな一となにおもひけん

三六六

よそにみ一あはれなるべきにわのをもかな

三六七

いて給ことあら一そのときに出家して

三六八

をしへなく一冥より冥にりりて

三六九

いてたまはざりせ一一切の衆生はくをのみうけ

三七〇

て法業をさつけ給は一(略)生死の苦輪廻をわたる

三七二

べきなり

三七三

申人あら一まつりかへむとりひければ

三七五

三悪道におつといは一我ちかて正覺をならじと

三七六

の給へり

三七一

証果の羅漢なく一持戒の比丘を供養せよ

三七二

持戒の比丘なく一破戒の僧を供養せよ

三七三

破戒の僧なく一かしらをそり衣をきたらん法師

三七四

を供養せよ

三七五

僧を供養せんと願は一無徳の僧を施すべし

三七六

白鷗の恩を報せんと思は一烏鷗養すべし

三七七

2 已然形十ば

二のめ一おのつから発心す

三七八

□子の乳をいるれ一みなぎえうせぬ

三七九

□子のちをりるれ一爛悩の(略)乳はまえうせぬ

三八〇

みにかけつれ一生死の海にしつむことなし

三八一

一念菩提心をおこせ一無上尊となる

三八二

仏跡をたふぬれ一大林精舎は名をのみぞく

三八三

伽藍をとひらへ一祇洹精舎は礎のみのこれり

三八四

しりたまへることなれ一申におよひ侍らぬども

三八五

かそべけれ一わつかに千七百人ぞ侍ける

三八六

とひ給けれ一人一人もなしとこそこたへ侍けれ

三八七

六才

三八八

六才

三八九

六才

三九〇

よぞろをかそふれー二万のさど人かすそひにけり

みゆきあれー文武百官陳をひぎ

一人出家すれー(略)宮殿振動するなり

出家の物一人あれー魔王振動するなり

心に念すれー難もなく

悪をかくれー口をまぬかる

さけーおほちすくるもの、(略)といひけるを

いそぎ □ みれーわがたまなうえられにけり

見れー御あしにとろうちづきてぞおはしましける

一辺を誦れー一切経を百万返よむ功德にひとし

名号を称すれーにくらくくに往生し

(助動詞十は)

もしいろあらましかー虚空にみちてぞあらまし

賞讃せざりけれー(略)せめむとし給けれども

遠国はれー不審も待なむ

あらましかーとおもふ人

ものかたりなれーごまかに申におよひ侍す

おはしましにしかー天下くれふたかりて

国母にておはしまししかー諒闇おほせられた

おひたゝしとなりにしかーすぎぬる春の御賀の

まひならんなどおもひいでられて

心うくがなしくおほえけれー(略)かくよみてぞ

まかりりてにける

りかにかくはの給ぞと申けれー(略)ごその給

けれ

おほせごありけれーひねとりふことをかくし

てよみ侍ける

うらみやすらんまたとゝはねー

見給けれー(略)交野 □ たかかりおもひいてられ

て

おとごにておはせましかーふるき大臣大納言に

てこそはおはせましか

(略)と申けれーすこしも心うこぎ給へる口もな

く口

ねりり給て侍けれーご公達はおかみしおこな

ひして

(略)との給けれーいま一度にとの給けるにあは
せま 三五〇

(略)とおほせられたれー(略)といへり 三五〇

ひさしくおにあらんずれーあまりものさほかし
とおもふほどに 三〇三

あらざりけれー本意をとけおしてやみぬ 三〇三

(略)といひけれー七十にて出家して 三〇三

(略)と申けれー大聖の、給やう 三〇三

(略)との給けれー(略)といひてかへりけるが 三〇三

(略)と申けれー(略)との給ければ 三〇三

(略)との給けれー(略)とて出家進世して 三〇三

まいりあはざりけれーかひなかりけれー 三〇三

(略)と申けれー(略)とこそ申ためれ 三〇三

是非業経にも申ためれー(略)浄土をもとめ給べき
なり 三〇三

とひたてまつりけれー(略)とぞの給ける 三〇三

(略)など申ためれー今生そらすくふこと 三〇三

□かりけれーやまにゆきあひて 三〇三

見けれーとりたりとおもふ馬はなくて 三〇三

しなんとしけれーぬのし、にたりて 三〇三

くしゆきけれーこの女おとこあはせたるせよ
こひて 三五〇

はかまをとらせたりにけれーよろこひていぬとお
もふほどに 三五〇

(略)との給しかー菩薩無慮のさぎらをひらき
て 三〇三

まめかれー□けれー菩薩苦にかはりて地獄にお
ち給 三〇三

人にておはせましかーこの口はつくりてくれ給
てまし 三〇三

こまかに見けれー(略)あしあこの口うなるもの
ぞ見え侍ける 三〇三

あはれみけれーあまりのうれしさに 三〇三

(略)と、ひけれー(略)とぞの給ける 三〇三

非業はれーこひうけたてまつるなり 三〇三

はぎぬたりけれー口まゆふくれに 三〇三

(略)と、ひけれーかゝることのあるといひける
をきゝて 三〇三

まいりて見けれー(略)つちうちつきてぞ
ましける 三〇三

みのすへにそちかく侍めれーまして 三〇三

天上ゆかしかりしかーせなかにをひて 三〇三

海にせしかり船にあらはれて

(略)とくハナク 智興無心なれば

これをみるにかたしくおほえけれ

(略)といふぬかをつきけれ (略)まなこよりく

れなるのみたをなかして

え心え給まじけれ 仏の分に申侍なり

まじりて見けれ (略)御隨身に人はらはせて

りり給けれ (略)もてなしかしこまり給ける

とりはたたつやうにおほえけれ (略)又うらや

ましくなりぬ

とをらせ給けれ (略)おはしまさざりけれとあ

もひたりて

(略)なんど申ためれーまことにたのもしくぞ侍

へぎ

悪人なりじかーたれか過去の如来としる

下劣のすかたなり 打人未来の教主とおも

はか

白鷗のなかりけれ 智臣申ていはく

(略)と申けれ 烏鷗を殺し給

三六〇

三五九

四三〇

人にとひけれー人あまりことにて軽慢して

(略)といひけれ 愚直まこと、信して

わたりけれー木つふふしにたちけることなり

本尊をもたざりけれ (略)本尊をこひければ

本尊をこひけれー少沙弥のありけるが

とらせたりけれー仏なめりと信して

信力をいたさざれー又々かくのごとし

ばかり

わづかに百日ーがうちに

うちつゝき六七月ーに

五六寸ーなる地蔵をもとめて

なを仏ーの人は

三六〇

三五九

四三〇

三六〇

三五九

四三〇

三六〇

三五九

四三〇

三六〇

三五九

四三〇



悪道一おとし給などの給しかば
 とらへからめて始末玉宮一ゆぞぬ
 六波羅の垣蔵一ぞつねにまいるける
 べし

「バから」(未然形)

あやしむ一ずとおもひて
 案にす一ず
 口徳はある一ずや
 いく一ず
 かろむ一ず
 あはつる一ず
 極楽に生まれおといふことある一ず
 「バし」(終止形)
 もとむ一と申は
 道心みちこころの力による一
 をろく申侍一
 一のせうをいたし侍一
 たのみとす一とこそ
 少々を申一
 せうく申侍一
 いのちなかゝる一と見て
 八十まである一といひければ

三四
 三三
 三二
 二一
 二〇
 一九
 一八
 一七
 一六
 一五
 一四
 一三
 一二
 一一
 一〇
 〇九
 〇八
 〇七
 〇六
 〇五
 〇四
 〇三
 〇二
 〇一
 〇〇

「バき」(連体形)

出家しておこなふ一と申ければ
 仏又りて給一
 その時出家す一といひて
 仏になる一と申は
 仏道をいのり給一とは申侍なり
 仏道をなり給一
 三宝を信す一とする
 仏道をいのり給一
 証を申侍一
 少々申侍一
 かへりきたる一といひて
 いのり給一
 僧の分に申一といふども
 仏になる一と申は
 おろく申侍一
 烏鴉を養す一
 僧を施す一とは
 烏鴉を養す一といひは
 烏鴉を養す一と申ければ
 をほかる一
 一両首を申侍一

一六
 一五
 一四
 一三
 一二
 一一
 一〇
 〇九
 〇八
 〇七
 〇六
 〇五
 〇四
 〇三
 〇二
 〇一
 〇〇

この口はつくりてくれ給てー
【まじき】(已然形)
もしいろあう ば虚室にみちてぞあらまし

三二五

よの中にあらーばとおもふ人
おとこにておはせーばふるぎ大臣大納言にて
こそはおはせまし

三八七

おとこにておはせましかばふるぎ大臣大納言にて
こそはおはせー(係結法)
人にておはせーばこの口はつくりてくれ給て
まし

三二五

【まじき】

【まじき】(連体形)

たれもまぬかるーことにて待ものを
【まじけれ】(已然形)
え心え給ーば私の分ホケに申侍なり

三〇四

まで

1 体言十まで

三月より五月ーわつかに百日ばかりがうちに

三〇三

あはれいつーあらんとすらん
けふーはふそにのみきく

三八三

三八七

三三二

これーはあかしものかたりなれば
八十一ーあるべしといひければ
七日ーなき給けるを
いかなることかありーえつくらざりける
をなけきて
さのふーつくらーしたの

三三三

2 連体形十まで

草木にいたるーなけきかなしめる
参川入道寂然にいたるー道心をこして
長大の時トキにいたるーかくのごとくして

三三三

【む】

む

【む】(終止形)

不審も侍なり
ぬすみてうらーとおもふ心つきぬ
もしをひたくかや見ー

七〇七

ゆきふみわけてきみをみーとは
みをすつることはあらーとおもふほとに

三三三

後世の資糧とせーと
国凶あらーとては
仙道をならーと申べきなり

三三三

後世の資糧とせーと

三〇七

国凶あらーとては

三〇七

仙道をならーと申べきなり

三〇七

仙道をならーと申べきなり

三〇七

をしのまねをせーに

を口のまねをせーがごとく

あにうたかひあらーや

ほのそゝふせかーがために

ほめられーがために

あにうたかふちのあらーや

ふせかーがために

したがへーがためなり

あに三味をいのらざらーや

わたりなりや

「むす」

「むす」の連体形

千年^{本千}万年^{本万}あらーやうにおもひて

「むすれ」の已然形

ぬにあらーば

めり

「めり」の終止形

ほめ捨て侍ー

をしなーとて

おほくきこゑ侍ー

一才四

二才一

三才五

三才三

三才一

三才三

三才三

四才三

四才一

六才二

七才三

まこと侍ー

まことにさなーと

おほく侍ー

したまへるなーとて

たたく侍ことなー

仙^本なーと信して

し給へるなーとて見れば

「める」の連体形

(係結法)

すゝめることにてぞ侍ー

むけにあらはにぞ侍ー

七分^本が一にぞあたるぞ申て侍ー

大般若^本経にぞ申たー

地藏^本の驗記にぞ申たー

たのもしくぞ侍ー

めてたくぞ侍ー

「めれ」の已然形

1係結法

仙道^本をもとめてこそ侍ー

おときみこそは民部卿^本長家とておはすー

おとゝきみこそは(略)北方にてー

豊山^本にぬられて侍ー(こそ虫損カ)

一才一

二才三

三才一

三才三

三才一

四才三

三才三

三才一

四才一

六才六

七才四

三才三

三才三

三才三

三才三

一才三

二才六

三才一

一才二

も

をのみ給とこそ申た

三〇三

2めれ十助詞

涅槃達こそ申た

三〇四

口すなど申た

三〇五

よのすへにそらかく侍

三〇六

まめかるなんど申た

三〇七

も

1体言十も

菩提心一切の煩惱の病を滅

三〇八

菩提心又々かくのごとし

三〇九

たれ善にはものうく

三一〇

大一人なし

三一〇

不審侍はむ

三一〇

むかしかく(略)とこそ日記家人々もの給けれ

三一〇

日記家人々の給けれ

三一〇

道心おこしたりときこゆる人なし

三一〇

たれまぬかるまじきことにて侍ものを

三一〇

こよひけふりのほりぬと

三一〇

いひてはかめし人いつらば

三一〇

これ(略)うせせ給にき

三一〇

かくはかなくならせ給ことめをとろきて侍

三一〇

べき

三一〇

いにしへたまのうてははみしかども

三一〇

興途のたひにはひかりなく

三一〇

これ十関白したまへり

三一〇

心うき給へる口な

三一〇

せうせうせでねり給て侍ければ

三一〇

いかたせうせし給はぬぞ

三一〇

かたときいはなれかたし

三一〇

仏昔(り)て給き

三一〇

むかし(り)仏(り)て給けれども

三一〇

大願(り)未来の衆生のため

三一〇

普行(り)濁世のわれらがため

三一〇

うしろめたきことども侍

三一〇

尺(り)またかくのごとし

三一〇

人にむまる、人なく

三一〇

天にうまる、ものなくして

三一〇

仏(り)これを解し

三一〇

聖(り)これに解す

三一〇

心に念すれば難なく

三一〇

現世の利益(り)あざからず侍

三一〇

とかくしてとらすべき人―なかりければ

一人―かはらむといふものなし

一度―束ち見ざりけるが

一度も京―見ざりけるが

阿防駱刹―いかてかかたざりたてまつらでは侍

らん

わが弟テヲシ―戒ケイをやふるといふとも

ひとたひ―なもあみたふつといふ人の

2 連用形ナモ

ほきはおほく―なりにけるかな

うらやましく―すめる月かな

3 副詞ナモ

返マタター―代タテ教主キウシウにももひをかけて

【ても】

はるきて―とはれざりけるやまさとを

やまがつとなりて―なをぞほとゝぎす

【とも】

はるのにわと―みえぬかな

【とても】

たれとて―とまりはつべきみならねど

現世ゲンセのカ口コ―たのもしくぞ侍める

【ほども】

申元々ウラタ年トシほど―あさましく侍しとしぞかしなき

【なんども】

ものなんど―えてくはむとおもひて

うれしほむど―おろかなり

【にも】

四位シ五位ゴなどの人―しられぬは

せう／＼の公達キョウダツに―おとらす

女メの中に―きこえ侍めり

玄ヘン花カ経キョウ六卷ロクワンのはし口コ―(略)とおほせられたれば

慶王ケイオウに―なかく奴婢ヌビをうしなふゆへに

涅槃ネパネ経キョウに―申マウためれば

法ホウ花カ経キョウに―の給タマフはこれなり

中ナカに―たのもしくかなしき文モンども侍

そこに―われをば(略)供養クヨウせらるゝなり

現世ゲンセに―めてたくぞ侍める

あひ給タマフへりけるに―(略)たすかり給タマフへりける

【とも】

和歌ワカを―いまたすてあはれざなり

たてまつりしを―ゆるこひ給タマフはず

ちをあやいしを―うらみ給タマフはず

【とも】

ころいしをーうとみ給は亦
ころし、をーにくみ給はず
金輪聖王をーうやまひ給はず
田夫野叟をーあそむま給はず
あはれみをーかみらむとおもひて
庭をーふまむとて

ものを

まぬかるましきことにて侍ー
よそにおもへるは侍ぬー



やの係助詞

工文中

うらみすすらん

もしをひたくかとー見む

正文末

仙道をもとめむ人をー
いはんや第二第三第四をー
おもひぎー
功德はあるべからずー
あにうたかひあらんー
僧の力にあ□ー

三六五

三六六

三六四

三六三

三六二

三六一

三六〇

三五九

*二六〇

*二六一

二六四

二六三

二六二

二六一

二六〇

いはんや冥途の苦患にをりてをー

これたれがちからぞー

あにうたかみものあらむー

幽采の金言にあらずー

あに三宝をりのらざらんー

このかはをわたりなんー

やの終助詞

おろかなるかなー

あはれなるかなー

あなたをしー

まことなるかなー

たのもしぞかなー



より

1 体言十より

大海は消露ーおこり

須弥は微塵ーはしまる

師子の座ーをりて

三月ー五月まで

御眼ーちをあやいしをも
御眼ーなみたをなかして

三六五

三六四

三六三

三六二

三六一

三六〇

三五九

三五八

三五七

三五六

三五五

二六四

二六三

二六二

二六一

二六〇

むかしー長大の時（略）にいたるまで

二三六

それー（略）とは申侍なり

二三七

まなこーくれなぬのみたをなつかして

二三八

左サマの樂屋（略）ー（略）乱声奏（略）して

二三九

御興（略）ーをりさせ給て

二四〇

きの枝（略）ーをとしつ

二四一

2 連用形（略）より

二四二

わかくー道（略）ありて

二四三

3 連体形（略）より

二四四

冥（略）ー冥（略）にりりて

し
やとりたまひしー一切（略）人民煩悩（略）のやまひを治（略）し

5

らむ

「らむ」の終止形

いつまであらんとすー

*合三

いつみのうへにならんとすー

*合一

「らむ」の終止形

「られ」の未然形

とらへーぬさきに

二四五

ほめーんがために

二四六

「られ」の連用形

とらへーてのち

二四七

とらへーて後

二四八

射（略）ー給ひ

二四九

いー給

二五〇

みりこめーて

二五一

うえーにけるかな

二五二

「らむ」の連体形

一年（略）に一度（略）供養（略）せーなり

二五三

死（略）苦（略）にせめーがゆへに

二五四

「られ」の連用形

御賀（略）のまひこらんなどおもひいてーて

二五五

たかかりおもひいてーて

二五六

聖山（略）にぬーて待めれ

二五七

去（略）花（略）經（略）六卷（略）のはし口（略）も（略）略（略）とおほせーたれば

二五八

「らむ」の終止形

吉志舞（略）をおほせー

二五九

□

(1)

「り」の連用形

二もりぬ給へーけるに

ふし給へーけるを

あつまり給へーし中に

ふせーけるもの□て

あひ給へーけるにも

たすかり給へーける

「り」の終止形

詠

りへー 三オ、三ウ、七オ、七ウ、一七オ、一七ウ、一七オ、一七ウ、三三オ、三三ウ、三九オ、三九ウ

のこれー

たてまつれー

なれー

将軍とせー

聞敷せー

関白したまへー

え給へー

の給へー

しるせー

三三ウ、三三オ、三九ウ、三九オ

三六ウ、三六オ

もてー

とけー

ひきりたせー

しほめー

「る」の連体形

1る+体言

しりたまへーこと

かくまとへー所なれども

としをい給へーさいしやう

うせ給へーこと

すめー月

繁島し給へーこと

うこき給へー口もなく口

いたてたてまつれーこと

たちたまへー□り

□みたてまつれー地₄蔵

ならひる給へー御₂弟₃

なやめー眼₂に₁なみたをうかへて

しるせー簡₂

2連体終止去

ふせー乞₂食₃の₂沙₃門₄

三三九

四オ、

四ウ、

三三ウ、

三三オ、

三九ウ、

三九オ、

一七ウ、

一七オ、

三三ウ、

三三オ、

三六ウ、

三六オ、

七ウ、

七オ、

四ウ、

四オ、

三六ウ、

三六オ、

るる十助動詞

かぎ給へーなり

よめーなり

し給へーなり

したまへーなめりとして

4.る十助詞

駁によめまは

おそにおもへーは

る

る(受身)

「れ」(未然形)

人にもしらぬは

はるきてもとほざりけるやまさとを

「れ」(連用形)

春のかせにさそは

仏法ほろほさて

項羽にゆか

大金国にとらて

羅睺羅のやうにあもはたてまつりて

をかさて

くはー給

四六〇

六七一

三三〇

三三〇

六〇〇

八〇七

を(格助詞)

1.体言十を

道心ーあこして

仙道ーもとむべし

道心ーあこせ

仏道ーもとめよ

猪金山ーすり

かせ求羅ーますがごとく

道心ーあこすべき物なり

こゝろもて

二四〇

淨刹にあくらたてまつるべきなり

風にあかて

めさーぬ

「る」(終止形)

秋のしもにうつさ

「る」(尊敬)

「れ」(未然形)

りまたすてあはざなり

「れ」(連用形)

諒闇おほせくたさて

三三〇

三〇〇

四〇〇

四〇〇

一〇〇

一〇〇

九〇〇

才二 三三〇

一〇二

一〇三

一〇四

一〇五

一〇六

一〇七

一〇八

はやく道心ミチココロ一このみて
 名利メカ一はなるべきなり
 一念善提心一念ぜんたいしん一発功徳はつこうとく
 百千の塔ひゃくせん一つくるにすくられたり
 仏道ぶつどう一もとめむ人をや
 おほくの輪りん一もて
 やまひやまひ一減するがごとく
 病やまひ一減へ
ニヤの鉛なまり一いりれば
ニヨのちち一いりれば
 住ぢゆ木もく宝ほう珠じゆ一かざりて
 菩提心ぼだいしんの玉たま一みにかけつれば
 はし花はな一もて
 一念善提心一念ぜんたいしん一おこせば
 うたかひうたかひ一なすことなかれ
 国土こくど一灰ひとなして
 水みづ一海うみにいれて
 仏ぶつ一つくりて
 菩提心ぼだいしん一おこさむ功徳こうとく
 十悪じゅあく一のそく
 功徳こうとく一う
 光明くわうみやう一はなちて

ニオ
ニオ二
ニオ三
ニオ四
ニオ五
ニオ六
ニオ七
ニオ八
ニオ九
ニ一〇
ニ一一
ニ一二
ニ一三
ニ一四
ニ一五
ニ一六
ニ一七
ニ一八
ニ一九
ニ二〇
ニ二一
ニ二二
ニ二三
ニ二四
ニ二五
ニ二六
ニ二七
ニ二八
ニ二九
ニ三〇

道心ミチココロ一おこさず
 世路よぢ一わしりて
 田ゐら一作やくをりは
 物もの一ならふ時は
 うけかたき人ひと身み一うけて
 仏法ぶつぽう一修行しゆぎやうせざる
 あしたの花はな一見る人
 月つき一なかむるもの
 たとひた一とりて
 仏ぶつ跡あと一たつぬれば
 名な一のみきく
 伽藍がらん一とふらへば
 樹こゝろ一はなれて
 うちかつうちかつ一もてきみとして
 一のせういちのせう一いたし侍しやくしせし
 兵へい一めすに
 この郷こゝろの人ひと一しるすに
 男おとこ女むすめ一あはせて
 かすそひてあるよしよし一いはひて
 小こをろ一かそふれば
 新羅國しんらこく一うちとり給たまはて
 本意ほんい一とけずして

ニ三八
ニ三九
ニ四〇
ニ四一
ニ四二
ニ四三
ニ四四
ニ四五
ニ四六
ニ四七
ニ四八
ニ四九
ニ五〇
ニ五一
ニ五二
ニ五三
ニ五四
ニ五五
ニ五六
ニ五七
ニ五八
ニ五九
ニ六〇
ニ六一
ニ六二
ニ六三
ニ六四
ニ六五
ニ六六
ニ六七
ニ六八
ニ六九
ニ七〇
ニ七一

安倍氏の長者一めして

安倍の氏一もて

吉志舞一おほせらる

権取一めして

速なること一うらむる

世中一よそにおもへる

南殿のみす一はしめて

今住の名利一すて

後世の資糧一まうけ給べきなり

眼口の功德一いとなみ

逆修の善一まうくべきなり

たとひ一もてをしへて

この蓮花一ひとふせえて

國王これ一もくして

多守護人一つけたり

鸞翫花一もてあそひて

をしのなくまね一するに

蓮花一ぬすみて

をしのまね一せんに

をしのなくまね一すれども

善一修するは

七〇三

七〇二

七〇一

七〇〇

六九九

六九八

六九七

六九六

六九五

六九四

六九三

六九二

六九一

六九〇

六八九

六八八

六八七

六八六

六八五

六八四

六八三

を口のまね一せんがごとく

仏道一もとめて

十善の位一すて

二系一たかうあけて

浄土一もとむる

國王一はしめたてまつりて

少々一申べし

ひねといふこと一かくして

万機一すて

玉のすたれ一いてて

神一かため

天曉一おとろかし

禁中一めぐり

隋一ひぎ

劍壺一とりて

きみ一みむとは

家一いて給にあらず

菩提心一あこして

仏道一もとめたためなり

やまさと一はなさまなほとなにあもひけん

ちりつちるみち一わけきて

けうとむ比血のあと一おひて

一〇一

一〇〇

九九

九八

九七

九六

九五

九四

九三

九二

九一

九〇

八九

八八

八七

八六

八五

八四

八三

八二

八一

仏道もとのめ給けり
 無上菩提 ねかはむもの
 つかひへてきたる人
 わかくて出家とけむこと
 これすては
 いかてかよすつることはあらん
 口の願とけず
 それたのみて
 本意とけずして
 本意とくるものなし
 四馬のたとひおもひて
 弥勒はしめて
 佛留孫はしめて
 佛土のおもひなして
 浄土もとのめ給べきなり
 僧のまねしたりし
 仏みたてまつること
 あまのけさきたりし
 のりきくことをえたりき
 のりをきくことえたりき
 まとすと申ことなり
 ぬひはなるなり

五〇一
 五〇二
 五〇三
 五〇四
 五〇五
 五〇六
 五〇七
 五〇八
 五〇九
 五〇一〇
 五〇一一
 五〇一二
 五〇一三
 五〇一四
 五〇一五
 五〇一六
 五〇一七
 五〇一八
 五〇一九
 五〇二〇

奴婢うしなふゆへに
 たまのかぶりかたふけて
 大悲心おこして
 三宝信したてまつりて
 道え給へり
 空王仏拝して
 仏口なり
 法花経つとめて
 正覚なり
 衆生みちひさ給
 三宝信して
 仏道のり給べし
 信心因とす
 信いたして
 浄土もとのめ給べきなり
 衆生あはれみて
 子おもひがごとく
 親尊(略)たのみたてまつりて
 無上菩提のり給べきなり
 祇園精舎つくりて
 仏身ふりちあやいしをも
 父ころいしをも

五〇二一
 五〇二二
 五〇二三
 五〇二四
 五〇二五
 五〇二六
 五〇二七
 五〇二八
 五〇二九
 五〇三〇
 五〇三一
 五〇三二
 五〇三三
 五〇三四
 五〇三五
 五〇三六
 五〇三七
 五〇三八
 五〇三九
 五〇四〇

法薬一さつげ給はッ
 苦輪一ひるべきなり
 薬のかめ一にきりてむまれ
 みのうちの病一み
 やまひ一うしなひ
 苦一まぬかる
 薬師如來一たのみたてまつりて
 療病泥一つくりて
 薬師の形像一安置し
 延壽寺一たて、
 これ一帰し
 いか、たのみ一かけたてまつらざらん
 身一三十三に変して
 十方の衆口一みちひき
 形一六種に現して
 五道の群類一すくひ給
 思一かくれば
 口一まぬかる
 うたかひ一なすことなく
 大口の誓願一あひきて
 往生極樂一ねがひ給べきなり
 観音かち一のへて

三五三
 三五四
 三五五
 三五六
 三五七
 三五八
 三五九
 三六〇
 三六一
 三六二
 三六三
 三六四
 三六五
 三六六
 三六七
 三六八
 三六九
 三七〇

左れか観音の來迎一はれたるはある
 大悲の悲願一あひきて
 來迎引攝一まろ給べきなり
 鳥一かくし
 救世のすかた一あら口し給
 人一いのり給ふ
 観音一つく口せて
 馬一ひきいたして
 仏師一まちうけて
 や一りたてたてまつれることなり
 わきのしたのし一ととりて
 一のち一いきたり
 おとこ一あはせ給
 観音一つくりたてまつり侍けるに
 おとこ一あはせたるせよる二ひて
 くれなひのはかま一とらせたりければ
 くれなひのはかま一かけて
 観音一あひきたてまつりて
 うたかひ一なすことなかれ
 無慮のさきら一ひらきて
 身一二十五にちらして
 二十五有一すくひ

三七三
 三七四
 三七五
 三七六
 三七七
 三八〇
 三八一
 三八二
 三八三
 三八四
 三八五
 三八六
 三八七
 三八八
 三八九
 三九〇

たひ人ーやとし

三〇八

罪人ーたすけ

三〇九

悪業ーなため給

三一〇

慈悲のきもーくたし

三一〇

忍辱のはたへーこかし給

三一〇

罪人ーとふらひ給

三一〇

誠ー申侍べし

三一〇

地蔵ーもとめて

三一〇

之はーかならずまいらせけるほどに

三一〇

田ー一段もちたりけるを

三一〇

地蔵講ー行けるに

三一〇

はーもちたりけるに

三一〇

なにこことーかくはなけき給ぞ

三一〇

それー見給べし

三一〇

華嚴經の偈ーとき

三一〇

法花經の咒ーよみて

三一〇

怨的ーふせかんがために

三一〇

かつまの相ー現し給

三一〇

さくーにきる

三一〇

劔ーもてり

三一〇

すかたーあらはす

三一〇

魔界ーしたかへむがためなり

三一〇

火の車ーくして

三二四

おもひーかけて

三二四

天上ーゆかりかりしかば

三二四

鬼難ーまぬかる

三二四

病患ーうけて

三二四

前後ーしらす

三二四

晴明ー請して

三二四

めー見まわしてみるに

三二四

これーみるに

三二四

なみたーうかへて

三二四

願喜のいろーあちはす

三二四

今生のすかたー見えて

三二四

このことーぞとて

三二四

ありさまーこしらへいひて

三二四

重病ーうけとりて

三二四

ぬかーつきければ

三二四

くれなぬのなみたーなかけて

三二四

おもひーかけて

三二四

内大臣左大将 教通 とのーはしめたてまつりて

三二四

陣ーひきて

三二四

まなしりーならへて

三二四

御まへー(略)とをらせ給ければ
 御りやうのそてーあはせて
 仏におもひーかけたりき
 おもひーなして
 諸仏におもひーかけて
 法ー信して
 因縁ーとけり
 これー頭宗といふ
 密宗のかたーおろく申侍べし
 ものかたりに申こごもー少々申侍べし
 いきものーころす
 苦慮ーまぬかれぬ
 一返ー誦れば
 一切経ー百万返よむ功德
 悪趣ーまぬかるなんと
 石ーきくに
 名号ー誦すれば
 大悲神咒ー受持せんもの
 正覚ーはらじ
 尊勝陀羅尼ーみて
 鬼難ーまぬかれ給ひ
 尊勝陀羅尼ーぬひく、みたりけるにぞ

三〇三
 三〇四
 三〇五
 三〇六
 三〇七
 三〇八
 三〇九
 三〇一〇
 三〇一一
 三〇一二
 三〇一三
 三〇一四
 三〇一五
 三〇一六
 三〇一七
 三〇一八
 三〇一九
 三〇二〇

銀の簡ーつみて
 在生(在)のつみーしるせる簡なり
 簡ーやさうてつ
 口ーぎくもの
 悪趣ーまぬかる、ことを
 しりぬ(略)まぬかる、こと
 縁覚ー申べきなり
 かしらーそり
 衣ーそめたらんものを
 衣をそめたらんものー帰依すべきなり
 雲ーおこして
 あめーそくがゆへに
 天童鉢ーもてめくる
 二、ーもて
 持戒の比丘ー供養せよ
 破戒の僧ー供養せよ
 衣ーきたらん法師
 法師ー供養せよ
 戒ーやふる
 白鷗の恩ー報と思はす
 烏鷗ー饗すべし
 僧ー供養せん

四〇一
 四〇二
 四〇三
 四〇四
 四〇五
 四〇六
 四〇七
 四〇八
 四〇九
 四一〇
 四一一
 四一二
 四一三
 四一四
 四一五
 四一六
 四一七
 四一八
 四一九
 四二〇

のつくりにてとらせけるが
えつくちざりける一はけきて

三三〇
三三一

(略)といひける一口くに
(略)といひける一きとて

三三二
三三三

かしこまり給ける一見て
たてまつらんとする一白駒これを見て

三三三
三三四

【まばし】

菩提心の功德一ばほめ給て侍めり

三三五

菩提心におこし給し一ば(略)おかみ給なり

三三六

中有のやみ一ば口らざりき

三三七

出家したるものゝな一ば怖魔とは申たるなり

三三八

三三九

善の衆住一ば羅睺羅のやうにおほし

三四〇

善の衆住一ば善星比丘のやうに見給

三四一

仏道一ばいのる口まなり

三四二

仏道一ばいのるべきなり

三四三

馬一ばとりてかへりぬ

三四四

未來悪世の衆住一ば世にふそくす

三四五

われ一ば(略)供養せらるゝなり

三四六

この地蔵一ばやまをくりの地蔵とは申侍なり

三四七

三四八

いのち一ばかるくし

三四九

ならふ所の經論一ばおもくして

三四〇

今生のいのち一ば師にかはる

三四一

仏道一ばねかひ給べきなり

三四二

意の多一ば(略)かろむべからず

三四三

【まもし】

和哥一もいまたすてあはれぞなり

三四四

祇洹精舎をつくりてたてまつりし一もよろこび

三四五

給はず

三四六

ちをあやいし一もうらみ給はず

三四七

父をころし一もうとみ給はず

三四八

向をころし一もにくみ給はず

三四九

金輪聖王一もうやまひ給はず

三五十

田夫野叟一もあざむき給はず

三五一

三宝のあはれみ一もかふるむ

三五二

庭一もふまむ

三五三

まへ問投助詞

仏道をもとめあ人一や

三五四

いはんや第二第三第四一や

三五五

いはんや冥途の苦患にをりて一や

三五六

たのもしぎかなや(略)ふせき給はむことを

三五七

↓たんごのかみため

ただあそむ

あね(姉)

↓おほあね

あふ

↓すてあふ

あふ(合ふ)

↓まゐりあふ・ゆぎ

あふ

あぶら(油)

↓にんぎょのあぶら

あり(有)

↓いとまあり・ここ

ろあり

(一)

いだし(出)

↓ひきいだす

いち(一)

↓しちぶんがいち

いちでう(一條)

↓ごいちでう・こ

ちでう(だしや

うはりとぎ・こ

ちでうのめん・こ

いちでうのめん

いちほむのみや(一品

宮)

↓さむでう(あんいち

ほむのみや

いちや(一夜)

↓いちにち(いちや

いづ(出)

↓まかりいづ

(い)のり(祈)

↓おむいのり

いふ(言)

↓しかりと(いへども

いへ(家)

↓おむいへ・にきの

いへ

いへつね(家経)

↓ふちはらのいへつ

ね

(い)み(忌)

↓おむいみ

(い)る(入)

↓ねじる

いんせい(引攝)

↓うりがういんせい

(二)

う(得)

↓こころう

うく(請)

↓こころう

うく(受)

↓まぢうく

うし(憂)

↓こころうし・もの

うし

うじようしやう(右丞

相) ↓こころうのうじよう

しやう

うす(失)

↓ぎえうす

うだいしやう(右大將)

↓こいちでう(右大

しやう(右大)

うだいじん(右大臣)

↓あはたのうだいじ

んどの・くでうの

うだいじんの

つちみかどのうだ

いじんの

うち(氏)

↓あやうち・あへの

うち

うつ(葉)

↓やきうつ

うへ(上)

したかまつどののう

入

うまのにふだう(右馬)

入道)

↓あきのぶのうまの

にふだう

あ

おうしゆん(雄俊)

↓しやくおうしゆん

おくる(送)

↓やまおくり

おとど(大臣)

↓おむおとど

おふ(負)

↓かきおふ

おほみや(大宮)

↓にでうおほみや

おむが(御賀)

↓ごじふのおむが

おゆ(老)

↓としおゆ

か

か

↓しかでか・いつか

は

が(賀)

↓おむが・ごじふの

おむが

が

↓かるがゆゑに・し

ちぶんがりち・わ

が

かい(海)

↓くりんかい

かう(香)

↓せんだんかう

かう(講)

↓ちざうかう

かうう(項羽)

↓そのかうう

かた(方)

↓きたのかた

かたし(難)

↓あひがたし・あり

がたし・うけがた

し・とどまりがた

し・はかりがたし

・はなれがたし・

入がたし・まうし

のべがたし・まぬ

かれがたし

かつ(勝)

↓うちかつ

かはら(河原)

↓れりせいかはら

かひ(変)

↓まつりかひ

かへる(返)

↓おほひかへる

かみ(守)

↓いかのみためな

り・しきのみよ

りなり・たんごの

かみためただあそ

む・ながこのかみ

にめつね

かみ(頭)

うまのかみあきの

ぶ

からす(鳥)

↓くろがらす

からむ(搦)

↓とらへからむ

かり(狩)

↓たかがり

がる

↓ゆかしがる

き

き(木)

↓うゑき

きたる(来)

↓かへりきたる

きみ(君)

↓おとぎみ・おとと

ぎみ・さむのきみ

・しのきみ・わか

きみ

きむだち(公達)

↓きむだちきむだち

きやう(卿)

↓きよゆきのきやう

・ぜんさいしやう

きみゆきのきやう

きやう(経)

↓りつさいきやう

くゑんおきやう

じふりんきやう

しゆつげくごき

やう・しゆつしや

うぼだいしおきや

う・せんじゆだう

にきやう・百いは

んにやまやう・ね

はんきやう・ひみ

つごうきやう・ひ

ゆきやう・ほうし

やくきやう・ほふ

くゑんきやう

きよゆき(清行)

↓ぜんさいしやうき

みゆきのきやう

きむこく(金国)

↓だりきむこく



く(来)

↓いでく・わけく

くう(宮)

↓くわうごうごう

ちやうあんくう

とうごう・ひはど

ののちうごう

くくむ(包)

↓ぬひくくむ

くさ(草)

↓きくさ

ぐす(具)

↓あひぐす

くだす(下)

↓おほせくだす

くごく(功德)

↓しゆつげくごき

やう

くに(國)

↓りづみのくに・か

みちのくに・きり

のくに・きのくに

・たんごのくに

いちうのくに・み

ののくに・ゑちせ

んのくに

くるま(車)

↓ひのくるま

べれん(紅蓮)

↓だりべれん

くわ(果)

↓じごふじとくくわ

くわうごう(皇后)

↓じんごうくわうご

う

くわこ(過去)

↓ばいわうくわこ

くわしやう(和尚)

↓さうおうくわしや

う

くわん(願)

↓だりくわん・ひん

わん

くわんあむ(観音)

↓あなふのくわんあ

む・かねがさぎの

くわんあむ・こか
はのくわんあむ・
なりあひのくわん

あむ

くわんぜあむほさつ

（観世音菩薩）

↓だりしやうくわん

せあむほさつ

くわんねん（元年）

↓あんぐえんくわん

ねん・ちやうとく

くわんねん

くわんはく（関白）

↓みだうのくわんは

く

くゑ（花）

↓せむぶくくゑ

↓りちだりけうしゆ

・だりせんけうし

ゆ

（一）

（二）

↓あむこ・みこ・を

のここ・をむなご

（く）（国）

↓しんたんこく・し

んちこく・だいき

あこく・びしやり

こく・まかつたこ

く

（く）（極楽）

↓わうじやうこく

く

（こ）（地）

↓あむここち

（こ）（御前）

↓にしのこぜん

（こ）（言）

↓あほせご

（こ）（事）

↓なごご

（こ）（毎）

↓しんてうご

（こ）（劫）

↓くじふいちご

むりやうご

（こ）（心）

↓ふりご

（こ）（殺）

↓りころす・つきこ

ろす

（こ）（権現）

↓くまのこんげん

（こ）（金）

↓かりこむじぎ

さ

↓あさましさ・うれ

しさ・たふとさ・

はかほさ

ざ（座）

↓ししのざ

さりしやう（宰相）

↓ぜんざりしやうき

みゆぎのきやう

さだりしやう（左大将）

↓かんみんのさだり

しやうあさみつ・

ないだりじんのさ

だりしやうのりみ

ちどの

さだいじん（左大臣）

↓くわんはくさだり

じん

さと（里）

↓やまざと

さはがし（鬚）

け

けうしゆ（教主）

さ

↓ものさはがし

さはぐ(騒)

↓はしりさはぐ

さる(去)

↓かたさる

さん(山)

↓ごだいさん・せん・

しよざん・てんだい

さん

さむでう(三条)

↓ごさむでうのあん・

さいさむでうのた

いしやう

さむまり(三昧)

↓くわちやうさむま

り



し

↓かほらすしも

じ(寺)

↓あんたうじ・えん

りやくじ・ぎやく

せんじ・ぎせんじ

・さうりむじ・ほ

ふじやうじ・しよ

じ・ほふかうじ

しくわう(始皇)

↓しんのしくわう

しげやす(重保)

↓かものしげやす

じじう(侍従)

↓すけたぶのじじう

しほう(師房)

↓さむみのちうじや

うしぼう

しふ(集)

↓きむえぶしふ・げ

んそんしふ・しよ

くしくわしふ・つ

きまうでしふ・ほ

うぶつしふ

しふみ(拾遺)

↓ごしふみ

しやう(庄)

↓いちごひやくしや

う

しやうじや(精舎)

↓だいいりむしやうじ

や

しやうにん(聖人)

↓くうやしやうにん

しやうねん(正念)

↓りむじゆしやうね

ん

しやうわう(聖王)

↓きむりんしやうわ

う

じやくねん(寂然)

↓みかはのにふたう

じやくねん

しやみ(砂弥)

むせうじややみ

しゆ(珠)

↓こむによいしゆ・

たま・かうすいほ

うしゆ

しゆじやう(衆生)

↓いつさけしゆじや

う

しゆじやく(朱雀)

↓ごしゆじやく・ご

しゆじやくのあん

しらかは(白河)

↓ごしらかはのあん

しんわう(親王)

↓ごのいのしんわう



す(爲)

↓あみす・あひぐす

・あんちす・かい

ふす・がうす・き
せりす・ぎやうす
・ぎやうまんす・
くす・くてうす・
くやうす・くぬえ
す・くゑす・くゑ
んぞくす・けうく
わんす・げんす・
しす・しやうす・
しゆぎやうす・し
ゆす・じゆす・じ
ゆがす・しゆつけ
す・しゆつけとん
せりす・しやうす
・しやうねむす・
しんす・しんどう
す・しんはいす・
ちりきす・せりす
・せうぢよす・せ
す・ぞうす・ぞん
す・たいす・ちす

・てうさんす・て
んす・とかりす・
なうらんす・ねむ
す・はいす・はん
じやうす・ふそく
す・へんす・ほう
す(報す)・ほう
す(崩す)・ほく
せりす・ほつしむ
す・めつす・りぞ
んす・わうじやう
す

す
↓しかのみならず
すぎ(痕)
↓しきしすぎ
すん(寸)
↓ごろくすん



せう(抄)
↓かゑんせう・しふ
ゑんせう
せうしやう(少将)
↓じげりへのせうし
やう・たかみつの
せうしやう・とき
のびのせうしやう
・ひかるのせうし
やう
せうねつ(焦熱)
↓たいせうねつ
せかり(世界)
↓じふはうせかり
せそん(世尊)
↓だいしやうせそん
せん(山)
↓さん・こむせん・
しゆみせん・りや
うせん
せん(善)

↓いちぜん
せんざい(千歳)
↓おくせんざい
ぜんりむ(禅林)
↓どうだいじぜんり
む



ぞ
↓なんぞ
そう(僧)
↓しよそう・せんそ
う・ぶつほふそう
・らうそう
そふ(添)
↓がすそふ
そんじや(尊者)
↓うばりそんじや・
かせふそんじや・
しやりほつそんじ

や

た

だい(台)

↓二もれんだい

たらし(太子)

↓しつだたいし・そ

うのたいし

だいし(大師)

↓こうほふだいし・

ちしやうだいし・

でんけうだいし

だいし(第四)

↓くわんだいし

だいしやう(大将)

↓さいさむでうのだ

いしやう・たかあ

さらのだいしやう

だいじん(大臣)

↓ざばだいじん・さ

がのだいじん・さ

だいじん・なりだ

いじん・なりだ

いんのさだいしや

うのりみちどの

だいなごん(大納言)

↓やまのみのだいな

ごんみちより

たifu(大夫)

↓だいなごんちうぐ

うのたいふよしの

ぶ・だいなごんと

うぐうのたりふよ

りむね

だいわう(大王)

↓えむまだりわう

だう(堂)

↓かはさきのろくか

くだう・ちうだう

・みだう・みだう

のくわんはく

だうしむ(道心)

↓あむだうしむ

たうり(桃李)

↓やうばりたうり

たがふ(違ふ)

↓いひたがふ

たつ(立つ)

↓りたつ・さきだつ

・したつ

たはぶる(感)

↓なきたはぶる

たび(度)

↓このたび

たま(珠)

↓しゆ・せうえふの

たま

ためたた(為忠)

↓たんごのかみため

ただあそむ

ためつね(為経)

↓ながとのかみため

つね

ためたり(為業)

↓りがのかみためな

り

ためより(為頼)

↓みちはらのためよ

り

だうに(陀羅尼)

↓なりぐだうに・せ

んじゆだうに・せ

んじゆだうにきや

う・そんしやうだ

うに・ほうけうい

んだうに

ち

ち(悲)

↓はくろち

ちうぐう(中宮)

↓だいなごんちうぐ

うのたりふよしの
ぶ・かほどののち
うぐう

ちうじやう(中將)

↓さむみのちうじや
うしばう・てるの
ちうじやう・なり
のぶのちうじやう

・なりひちのちうし

じやう・なりふさ

のちうじやう

ちうなごん(中納言)

↓ちもぞのちうな

ごんやすみつ

ちかもり(親盛)

↓ふちはらのちかも

り

ちこう(智興)

↓ぞんじやうじのな

いぐちこう

ちごく(地獄)

↓だいちごく
ちやうじや(長者)
↓じゆたつちやうじ

や

フ

↓しもつみち

つく(着く)

↓うちつく

つく(付)

↓ちかづく

つじ(辻)

↓あはらのつじ

つづく(続)

↓うちつづく

つつみ(堤)

↓にでうつつみ

つもる(積)

↓ちりつもる

テ

て

↓おりて・おきて・

さだめて・さて・

はじめて・まして

でし(弟子)

↓おむでし・みでし

・みでしども

てら(寺)

↓えふてら・ぎよみ

づでら・やまでら

・やまでらほふし

てんか(天下)

↓いちてんか

てんし(天子)

↓しやうむくてんし

・せんみやうてん

し・ゑしやうてん

し

てんわう(天皇)

↓くわうきよくてん

わう・てんちてん

わう

ト

と

↓しかりといへども

とう(等)

↓ちざうとう

とうぐう(春宮)

↓だりなごんとうぐ

うのたりふよりむ

ね

どうじ(童子)

↓せんざいどうじ

やくどうじ

とき(時)

↓おむとき・かたと

ま

とし(年)

↓おむとし

どの(殿)

↓あはたのうだいじ

んどの・うちどの

・おほにでうどの

・くでうどの・く

でうのうだいじん

どの・さいぐうど

の・しちでうどの

・たかまうどのの

うへ・ないだいに

んのさだいしやう

のりみちどの・ひ

とも(伴)

↓おむとも

ども(共)

↓おにども・こどど

も・みでしども・

もんども

ども

↓いへども・ざれど

も・しかりといへ

ども・しかれども

とる(取る)

↓うけとる・からめ

とる

とんせい(遁世)

↓しゆつくとんせい

す

な

なり(内)

↓いちひやくゆじゆ

んない

なり(内供)

↓をんじやつじのな

りぐちこう

なか(中)

↓よのなか

ほり

↓あざやかなり・あ

ながちなり・あは

れたり・あまりな

り・あらはなり・

いかなり・いくば

くなり・おほまな

り・おろかなり・

おろそかなり・か

すかなり・ことな

り・ことわりなり

・こまかなり・し

かのみならお・す

みやかなり・だい

じなり・たしかな

り・たへなり・ね

むごろなり・はる

かなり・ひそかな

り・ふじやうなり

・まことなり・わ

づかなり

ほりすけ(成助)

↓かものほりすけ

なりとき(斎時)

↓うだいしやうなり

とき・こいちでう

うだいしやうなり

とき

なる(際)

↓おもひなる

に

にでう(二糸)

↓おほにでうどの

にのみや(二宮)

↓れいせいぬんのに

のみや

にふだう(入道)

↓あきのぶのうまの

にふだう・ないぎの

にふだうやすたね

みかはのにふだう

じやくねん

によらい(相来)

↓じやくかによらい・

やくしによらい



の

↓あぎのぶのうまの

にふだう・あねふ

のくわんあゑ・あ

はたのうだいじん

どの・あはらのつ

じ・あべのうぢ・

いがのかみためお

り・いきのかみよ

りなり・いちのひ

と・いちほむのみ

や・りづみのくに

・うまのかみあぎ

のぶ・かねがさぎ

のくわんあゑ・か

の・かはさぎのろ

くかくだう・かふ

ちのくに・かもの

しげやす・かもの

なりすけ・かんぬ

んのさだいしやう

あさみつ・まりの

くに・きたのかた

・ぎのくに・まじ

のだいじん・まよ

ゆぎのまやう・く

でうのうせうしや

う・くでうのうだ

いじんの・くで

うのぬん・ぐへい

のしんわう・くわ

ざんのほふわう・

くわんへいのほふ

わう・ぐみのぶて

い・けんしゆんも

んのぬん・こりち

でうのぬん・こり

ちでうのぬん・こ

かはのくわんあゑ

・ごさむでうのぬ

ん・ごしゆじやく

のぬん・ごじぶの

あゑが・ごしらか

はぬぬん・この・

このたひ・これた

かのみこ・さいさ

むでうのだいしや

う・さいのぬわう

・さむでうぬんり

ちほむのみや・さ

むのまみ・さむあ

のちうじやうしば

う・しうのぶわう

・しげいへのせう

しやう・ししのざ

・しのまみ・じや

うさりもんのぬん

・じやうとうもん

のぬん・しんのし

くわう・すけたふ

のじわう・せうえ

ふのたま・ぜんさ

りしやうまゆき

のまやう・せんり

のはま・そののた

りし・その・その

かうう・たりけん

もんのぬんのひや

うゑ・だいなごん

ちうぐうのたりふ

よしのぶ・だりな

ごんとうぐうのた

いふよりあね・た

があぎらのだりし

やう・たかまつど

ののうへ・たかま

つのもん・たかみ
 つのせうしやう・
 たちばなのよしと
 し・たむのみね・
 ・たんごのかみ
 ためたてあそむ・
 たんごのく下・つ
 ちみかどのうだい
 じん・てるのちう
 じやう・ときのみ
 と・とぎのぶのせ
 うしやう・とりか
 むのめん・なりき
 のにふだうやすた
 ね・なりたけじん
 のさだけしやうの
 りみちどの・なが
 とのかみためつね
 ・ほちのやま・ほ
 りあひのくわんあ
 む・なりひらのち

うじやう・ほりふ
 さのちうじやう・
 なりのぶのちうじ
 やう・にぎのいへ
 ・にしのごせん・
 にんぎよのあぶら
 ・ひえのやま・ひ
 かるのせうしやう
 ・ひちうのくに・
 ひのくるま・ひは
 どののちうぐう・
 ひるたのみやうじ
 ん・ふちはらのい
 へつね・ふちはら
 のためより・ふち
 はらのちがもり・
 ほうれんのみこし
 ・みかほのにふだ
 うじやくねん・み
 ののくに・ももぞ
 ののちうほごんや

すみつ・やまのる
 のたりなごんみち
 より・よのなか・
 りやうのぶわう・
 れいぜいあんのに
 のみや・えちせん
 のくに・をんじや
 うじのほりぐちこ
 う

のぶ(延)
 ↓まうしのべがたし
 のみ
 ↓しかのみならぬ
 のりみち(教道)
 ↓ほりたけじんのさ
 だけしやうのりみ
 ちどの

↓あるいは・いつか
 は・かつは

は
 ↓ごらば・されは・
 ちとへは

はつ(果)
 ↓とまりはつ

はなつ(放)
 ↓ふははなつ

はは(母)
 ↓あむはは

はま(浜)
 ↓せんりのはま
 はんにやまやう(般若
 經)
 ↓だいはんにやまや
 う

ひ(火)

は

ひ

↓もしほび

びく(比丘)

↓しまんびく(ぜん)

しやうびく(ろく)

ぐんひく

ひくに(比丘尼)

↓けうどむびくに

ひと(人)

↓いちのひと(くら)

ひと(つかまつり)

ひと(ときのみと)

ひらく(開)

↓まうしひらく

びやうみん(病院)

↓れうびやうみん

ひやうゑ(兵衛)

↓たいけんもんのゐ

んのひやうゑ

ふ

ふ(経)

↓ほどふ

ふす(伏)

↓あふぎふす

ふたがる(蹇)

↓くれふたがる

ぶつ(仏)

↓くるそんぶつ(く

わうぶつ(しよぶ

つ

ぶてい(武帝)

↓ぐみのぶてい

ふどうみやうわう(不

動明王)

↓だいしやうぶどう

みやうわう

ぶにん(夫人)

↓まやぶにん

ふみ(文)

↓うけぶみ

ぶわう(武王)

↓しうのぶわう(リ

やうのぶわう

ほ

ほうしゆ(宝珠)

↓ちうすいほうしゆ

ほさつ(菩薩)

↓ぎやうきほさつ(

ちごうほさつ(ふ

ぎやうほさつ

ほだい(菩提)

↓あのかほだい(む

じやうほだい

ほとけ(仏)

↓おむほとけ

ほふじ(法師)

↓しゆんゑほふし(

やまでらほふし

ほふわう(法皇)

↓くわざんのほふわ

う(くわんハリの

ほふわう

ま

また(又)

↓またまた

まなこ(眼)

↓あむまなこ

まはす(廻)

↓みまはす

まひ(舞)

↓ぎしまひ

まへ(前)

↓あむまへ

まんねん(万年)

↓せんねんまんねん

み

みこ(親王)

↓これたかのみこ
みこし(御輿)

↓ほうれんのみこし

みち(道)

↓しもつみち

みちより(道順)

↓やまのみのだいな

ごんみちより

みつ(満)

↓あきみつ

みね(峯)

↓たむのみね

みや(宮)

↓いちほむのみや

さむでうゐんいち

ほむのみや

みやうじん(明神)

↓みろたのみやうじ

ん

みやうわう(明王)

↓だいにしやうぶどう

みやうわう・だい
しやうみやうわう

みる(見る)

↓おもひみる

む

む

↓いはむや

むち(無智)

↓たにしよくむち

むねひら(致平)

↓ひやうぶぎやうむ

ねひら

め

めたし

↓うしろめたし

も

も

↓かならかしも・す

こしも

もの(物)

↓いぎもの・みつぎ

もの

ものがたり(物語)

↓むかしものがたり

・やまとものがた

り

もんじゆ(文珠)

↓だいにしやうもんじ

ゆ

や

や

↓いはむや

やぎやう(夜行)

↓ひやくくゐみやぎや

う

やすし(易)

↓たやすし

やすたね(保胤)

↓なりきのにふだう

やすたね

やすのり(保則)

↓みんぶぎやうやす

のり

やすみつ(保光)

↓ももそののちうな

ごんやすみつ

やま(山)

↓なちのやま・ひえ

のやま・ひがしや

ま

ゆ

ゆき(雪)

↓ホほゆき

ゆく(行)

↓おとろへゆく・ゆ

しゆく・すぎゆく

ゆじゆん(由旬)

↓いちひやくゆじゆ

んない

ゆふぐれ(夕暮)

↓はまゆふぐれ

ゆゑ(故)

↓それゆゑ

ゆゑに(故)

↓かるがゆゑに

よ

よしとし(能俊)

↓たちばなのよしと

し

よしちか(義懐)

↓ちうなごんよしち

か

よしのぶ(能信)

↓だいなごんちうな

うのたいふよしの

ぶ

よりのなり(頼業)

↓いぎのかみよりの

り

かりむね(頼宗)

↓Eいなごんとうな

うのたいふよりの

ね

みろこぶ(喜)

↓ほめよるこぶ

なわし(弱)

↓にころなわし

ら

ら(等)

↓だいにんら・われ

ら

り

りつし(律師)

↓やうくわんりつし

れ

れりぜり(冷泉)

↓これりぜりゑん

れんぐゑ(蓮花)

↓ししきれんぐゑ

ろ

ろくかくだう(六角堂)

↓かはさきのろくか

くだう

わ

わう(王)

↓あいくわう・あじ

やせわう・いわう

・えむまわう・ま

すわう・きむりむ

しやうわう・こく

わう・さいのゑわ

う・さんわう・じ

やうぼんわう・せ

んけんやくわう・

だいわう・まわう

・みやうわう・や

うけんわう

わうくう(玉宮)

↓えむまうくう

わうじ(玉子)

↓にんやくわうじ

ほふざいわうじ

わうじやう (往庄)

↓く夏つちやうわう

じやう

わづらふ (煩)

↓おもひわづらふ

ぬ

ぬる (屠)

↓こもりぬる・なき

ぬる・ほらびぬる

・のこりぬる

ぬわう (魔王)

↓さいのぬわう

ぬん (院)

↓いちでうぬん・け

んしゆんもんぬ

ん・くでうぬん

・くわんおぬん

・こいちでうぬ

ん・ごいちでうぬ

ぬん・ごさむでう

ぬのぬん・ごしゆじ

やくぬぬん・ごし

らかはぬぬん・ご

れいせいぬぬん・さ

むでうぬぬん・さむ

でうぬぬんいちほむ

のみや・じやうさ

いぬぬぬぬぬぬぬ

やうとうぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬ

・たかまつぬぬぬ

・とりかひぬぬぬ

・なぬぬぬぬぬぬ

うぬぬぬぬぬぬぬ

もんぬぬぬぬぬぬ

れいせいぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬ

・ぬぬぬぬぬぬぬ

を

をん (苑)

↓しんせんをん

を

をち (叔父)

↓おもをち

をん (園)

↓きふごどくをん

【最明寺本室物集縮録引編 語彙索引補訂Ⅱ】

一、本補訂Ⅱには、鎌倉時代語研究第一輯正誤表

掲載以外のものを掲げる

第一部（自立語の部）（頁等は第一輯のもの）

(頁) (誤)

三六一 五 をほかるべし 四三〇 ↓をほかるべし 四三〇

一〇四 三 きたりて 三三三 ↓きたりて 三三三 (補)

一〇四 二 くららく(化) 三三三 ↓くららく(快) 三三三 (補)

一〇四 一 くららく(化) 三三三 ↓くららく(快) 三三三 (補)

一〇四 〇 くららく(化) 三三三 ↓くららく(快) 三三三 (補)

一〇三 三 くらしくも 三五五 ↓くらしくも 三五五

一〇三 二 くらしくも 三五五 ↓くらしくも 三五五

一〇三 一 くらしくも 三五五 ↓くらしくも 三五五

一〇三 〇 くらしくも 三五五 ↓くらしくも 三五五

一〇二 四 くらすへき 三三〇 ↓くらすへき 三三〇

一〇二 三 くらせけるが 三三〇 の前に新項目をたて

一〇二 二 くらせたり 四五五 上記五例を終す。

一〇二 一 くらせたりければ 四五五 くらす(取す)

一〇二 〇 くらせてけり 三六二 くらすへき 三三〇

一〇一 六 くらせたり 四五五 くらせたりければ 四五五

一〇一 五 くらせてけり 三六二 くらすへき 三三〇

(頁) (誤)

(正)

二三四 三 ものを 六三〇 ↓ハオヲを削除

二三四 二 ものを 六三〇 ↓ハオヲを 二段も行四を

二三四 一 ものを 六三〇 ↓ハオヲを 二段も行四を

二三四 〇 ものを 六三〇 ↓ハオヲを 二段も行四を

二三五 二 三「やうくわんりつし」 ↓やうか(八日) 八日 (補)

二三五 一 三「やうくわんりつし」 ↓やうか(八日) 八日 (補)

二三五 〇 三「やうくわんりつし」 ↓やうか(八日) 八日 (補)

二三五 下 一 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二三五 上 一 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二六 下 一〇 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二六 上 一〇 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二六 下 二 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二六 上 二 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二六 下 一 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二六 上 一 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二六 下 〇 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二五 下 六 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二五 上 四 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二五 〇 〇 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二五 〇 〇 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して

二二五 〇 〇 ずしも徹底して ↓ずしも徹底して